大日本名所圖會

第八十三編

東京近郊名所圖會 第八卷

東陽堂發行

此廣告を見て御取引の御方は「風俗畫報」廣告に據る旨御附記を乞ふ

風俗畫報增刊

名所風俗之部

○鎌倉名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○香取名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○東本願寺葬式圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○鹿島名所圖會　全一冊　定價廿錢郵稅一錢五厘
○御大喪圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○臺灣蕃俗圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○東京歲事記　○、○　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○雪況圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○足尾銅山圖會　全一冊　定價卅五錢　郵稅一錢五厘
○郵船圖會　全一冊　定價五十錢　郵稅二錢
○伊豆七島圖會　全一冊　定價三十錢　郵稅一錢
○橫濱名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○成田鐵道名勝誌　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○江島名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢

福之部

○第三回內國勸業博覽會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○京都大博覽會　全一冊　定價三十錢　郵稅一錢
○日本婚禮式　上、中、下全三冊一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○覺都三十年祭圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○豐公三百年祭圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
○慶事集　全一冊　定價三十錢　郵稅二錢
○東京勸業博覽會圖會　全五冊　一冊十五錢　郵稅一錢
○新年の祝　全一冊　定價四十錢　郵稅二錢
○菅原大神千年大祭圖會　全一冊　定價三十錢　郵稅一錢五厘
○日蓮宗大聞宗祖六百五十年紀念大會圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢五厘
○第五回內國勸業博覽會　上下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○岐阜震災起聞　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○臺灣土匪掃攘圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一金
○三陸海嘯被害錄　上、中、下全三冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○大洪水被害錄　上、中、下全三冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○江戶の華　上、中、下全三冊一冊定價十五錢　郵稅
○世明聖治火災消防圖會　全一冊　定價三十錢
○明治廿三年各地災害圖會　上、下　全二冊一冊定價二十錢　郵稅一錢
○日清戰爭圖會　自一編至十編　全十冊一冊定價　郵稅一錢
○臺灣征討圖會　自一編至五編　全五冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
○支那戰爭圖會　上、中、下　全三冊一冊定價二十錢　郵稅一錢
○西本願寺葬式圖會　全一冊　定價二十錢郵稅一錢五厘

新選東京名所圖會

每一冊二付
定價金十五錢郵稅一錢

○上野公園　上、下　全二冊
○淺草公園　上、中、下　全三冊
○芝公園　上、中、下　全三冊
○麴町、愛宕、清水谷公園　全一冊
○深川公園　全一冊
○湯島、根津、白山、王子、高田、坂本、日比谷、蒲生山、飛鳥山公園　全一冊
○隅田堤　上、中、下　全三冊
○本所區　一、二、三　全三冊
○東京總說并內廓之部
○麴町區　上、中、下、下ノ二　全四冊
○神田區　上、中、下、下ノ二、三　全五冊
○日本橋區　上、中、下ノ二　全四冊
○京橋區　上、中、下　全三冊
○芝區　上、中、下　全三冊
○麻布區　上、下　全二冊
○赤坂區　上、下　全二冊
○四谷區　上、下　全二冊
○牛込區　上、中、下　全三冊
○小石川區　上、中、下ノ、下二　全四冊
○本鄉區　上、中、下　全三冊

大日本名所圖會第八十三號目次

明治四十三年十二月十五日發行

東京近郊名所圖會第八

◎口　繪
品川大井お諏訪神社及天祖神社の圖

◎挿　繪
品川本光寺、大體寺、天龍寺、海晏寺、天妙國寺、海晏寺、同紅葉の圖、午頭天王社東海寺、四圖少林院林泉縣居大人墓、南郭先生墓、來福寺、西光寺、弘福寺、

◎寫　眞
袖ヶ崎橋、雄子神社、戒法寺、本願寺、最上寺、居木橋、島津邸、隨崇寺、目黑停車場、大崎町役場、東福寺、妙茶園、氷川神社、來福寺、地藏堂、日蓮宗大學、伊藤公の墓、日本體育會荏原中學校、大崎停車場、池田侯邸園、東福寺內弘法大師堂參詣者、清岸寺、祐天上人手植の櫻、

◎南郊の部　其二

○品　川　町
品川御殿
橋家歟拜借地
品川公園　松本烈士墓
品川神社の舊神體
品川神社の什寶
御殿山の名木と名井
東海寺
　舊況　現況
京濱間電氣鐵道
常行寺
妙華園
池上道
淺間道
品川海岸の石垣
本光寺
大體寺
天龍寺
海晏寺
公爵學校會社
鈴木道風の舊蹟
心敬僧都の墓蹟

○大　井　町
上大崎
陸軍衛生材料廠
延生八幡神社
高福院
妙閑寺
增上寺下屋敷
最上寺
本願寺
戒法寺
清岸寺
光取寺

○下　大　崎
島津邸
下大崎坂　袖ヶ崎橋
雄子宮
寶塔寺
本立寺
池田邸

○谷　山

○居　木　橋
居木神社
觀音寺

○桐　ヶ　谷
氷川神社
安樂寺
茶毘所

大　井　町
橋姫臺　成蹟と貝塚
品川氏町屋敷跡
恩賜館
伊藤公の墓
料理店川崎屋
八幡神社
立會川
西光寺
荏原神社の舊蹟
光福寺
來福寺
　尾原松延命櫻
　尾原塚
來福寺地藏堂
御林町の漁家
白山神社
荏原郡內有名の墳墓

品川諏訪神社と天祖神社 明治三十年當時景

大日本名所圖會第八十三號

山下重民編

○東京近郊名所圖會　其八

◉南郊の部第二

本編は品川砲臺を首め。名刹東海寺常行寺本光寺天龍寺等の事を詳述し。鈴木道胤、心敬僧都の舊蹟を尋ね。京濱電車停留場の附近遊覽地を案内し。大崎町に至り。增上寺下屋敷、有名なる雉子宮居木神社氷川神社等を説明し。更に大井町に轉じ。恩賜館及び伊藤公の墓地より權現臺、立會川西光寺光福寺來福寺等の名所を記載し以て古今の實況を示せり。次編には本編の遺漏を補ふの外目黒村を紹介すべし。

◉品川砲臺

人手して山をば海に移しつゝ。築きしものは是かとよ。敵の迫りしふる事を。語る臺場の口ぞ寒けれ。

品川砲臺は。北品川の沖一里餘の處に在り。第一番より第六番に至る。其の第一、第二、第三は斜めに西より東に配置し第四、第五、第六は其の間を縫ふて後方に位置す。俗に之を品川の御臺場といふ。

第二砲臺には燈臺あり。大抵陸軍省の管理に屬し。兵器廠の倉庫を置けり。其の中に文部省農商務省の使用せるものもあり。此砲臺は米國の使節軍艦を率ゐて浦賀に渡來し。海防の急なるに當り。安政の初御殿山を鑿削し其の土石を以て築きしものなり。

舊政府留記に其の費用の豫算額と決算額とをしるしあれば。左に之を掲ぐ。

内海一二三五六御臺場四番岩埋立、品川御殿下海岸御臺場御普請、大筒鑄立、臺仕立、玉鑄造、大船其外御船製造品、石類銅鐵錫等諸拂代並諸職人足賃銀總御入用

一金九十八萬六千四百九十一兩三分餘

内

金七十六萬三千八百七十一兩二分餘

是は御臺場御普請御入用

金十五萬八千九百六十三兩一分餘

是は大筒並臺玉共御入用

金六萬三千六百五十七兩餘

是は大船其外御船製造御入用

但追而仕上の上增減御座候筈

按するに右の費額は所謂積り書にして豫算額な

るべし。

朱書

伺齊合金七十八萬九千八百五十九兩一分永六文五分

一金七十五萬二百九十六兩永百八文三分　　仕上御入用

伺濟と差引

金三萬九千五百六十三兩永百四十八文三分　　仕上減

按するに仕上とあれば。決算額なるべし。

安政四年

丁巳七月書上

此砲臺建築の際。彼の長唄老松に擬して作れるものあり。言の葉草といへる寫本に載す。今左に錄して讀者の一粲に供す

そも〳〵夏のきびしき頃。萬國の異船十八挺の大筒戰場の身ぶりをなして軍の色を見す。陣の趣向の見張のため。海俄にわりつもり。臺をしきりに築しかば。湊に土を運ばんと。小船の數の寄つとふ。この島たちまち臺場となり。石をたて日をかさね。雨間風間をしのぎて。その浪を越さりしかば。味方大利と申とかや。かよふに手堅き海岸に數筒をたぶんならべおき。鐵を捧げて御修復に。筒の萬法古かねの直し絶せぬ唐銅鑄つゝ。とふ〳〵とたゝらの內へ納る玉そそ目方なれ。

節。寡欲恬淡胸次如二白日一。狀貌如二金剛神一。年過二四十一而不レ畜二妻孥一。一條槍一籠書隨室無レ帚。衣服雖二敝穢一數月不レ換。客至則咬二菜根一對酌。醉則吟二文文山正氣歌一。聞二人之急一則典二所著衣一以周レ之。然好レ氣使レ酒視二奇險陰陂者一大聲罵詈。而於レ一技一行少異レ於レ衆者。奇愛激賞。不レ復問二學術同異及他過失一。人亦以レ是親レ之。嘗邸報告二兄病一。方飯吐レ哺卽起。晝夜兼程三日走二七十里一。擢二藩副教一。論二學君相前一。能言二人所レ難レ言。傍人汗浹而藩侯(松平容敬)優二容之一。方二進講一侯就二上席一而坐。重信曰。臣今講二聖經一。公宜レ避二上席一。自正二几案一坐。公上二而講說一。時方盛夏炎日鑠レ金。重信流汗如レ珠。乃探レ袖取レ巾。誤出二犢鼻褌一。適風至掀翻。因徐伸二左臂一縮レ手拭レ面自若也。重信至二家老某家一。某爲置レ酒饗二魚骨羹一。重信起擲レ椀曰。來藏不レ喫二魚骨一矣。某平生鄙吝故罵レ之也。重信拉二其友佐藤甚右衞門一。觀二戲劇一。劇演二孝子薄命狀一。甚右感愴淚交レ睫。然恐レ爲二重信一所レ罵。勉强呑レ聲而不レ能二自禁一。顧視重信滴淚滿レ面。因相持而泣。其樸直率此類。議者謂國家設二科第一取レ士必居二直言極諫之首一矣。重信旁好レ兵善レ槍。其所二措畫一卓然出二人意之表一。一日攤二洋書一見二一母乳二五子圖一。戟手大罵曰。婪哉虜也。獨不レ知二乾乳之不一可レ鑛二男子國邪一。由レ是留二心邊務一。單劍孑行北入二蝦夷一。西南極二肥筑豐薩一。以縱二觀天下形勢一。其遊二薩摩一。旅費已罄。告二實於逆旅主人一。主人曰君無二技藝一耶。曰書レ字。主人試請二其書一。重信搦レ管一揮。字字飛動墨漬淋漓。就求レ書者多。臨レ別贈二若干金一。重信僅留二旅資一。返二其餘一。有レ贈二虎皮一者一。欣然受レ之。將レ出二薩境一爲二關吏一所レ譏。乃首レ實。吏曰子借二虎皮一來邪。蓋藩法禁レ濫二出獸皮一。故爲二重信地一也。重信厭二問答之煩一。投二虎皮而去。天已寒將レ登二阿蘇山一。日加レ午土人曰不レ如明旦攀援也。重信不レ肯至二半腹一而日沒。乃席二外套一。枕二樹根一而睡。夜半大雪沒軀。飢寒甚所レ席外套皆凍。乃折二其端一嚼レ之。明旦土人來扶レ之得レ不レ死。重信過二越州親不知險一。有レ詩曰從來危險不レ可レ過。孝子千金奈レ命何。忽地海鳴颶風疾。後波重疊駕二前波一。旣歸二江戸一。過二永代橋一。倏跳入二水中一。衣裳沾濡殆沈溺。同行高木五平急投レ水救レ之。倒懸吐レ水僅蘇。問二其故一。曰魯人窺二察我國一。防レ之不レ可レ不レ知二遊泳一。故試レ之耳。蓋重信未二嘗知一其術一也。時自磨レ劍揮レ槍。皆所二以備一緩急一也。常曰豆相房當二江戸之咽喉一。乃跋二涉沿海一。察二防海利害一。就二洋學者一問二外國事情一。將レ有所二論著一以建策一。天保九年春代官羽倉用九奉二幕命一巡二視伊豆諸島一。以撫二居民一。議二海防一。募二儒士從行一。多以二風濤險惡一憚レ之。重信奮以行。將レ赴二倉島一。颶俄起舟覆而沒。年五十聞者莫レ不二悼怛一。諸友建二石於吉瑞岡一。埋二遺墨一爲レ靈以招二其魂一。岡枕二品海一。俗呼曰二天王山一。古松鬱蒼。前與二砲臺一對。東南控二房總一。與二豆洋一彗云。重信詩文散逸不レ傳。其詠史曰堂堂北斗以南人。不レ使二牝雞司一早晨一。育得滿門桃李樹。再看四海一家春。

○塙家舊拜借地

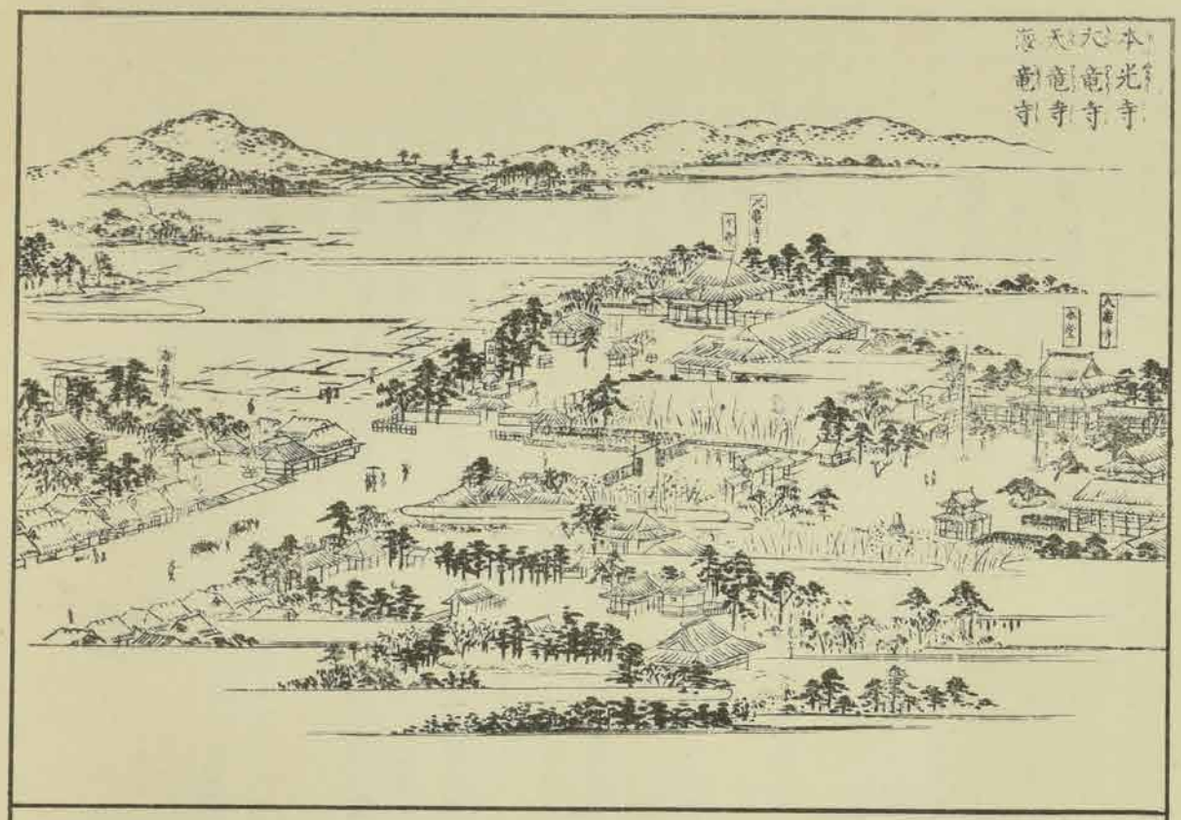
塙家舊拜借地は。品川步行新宿鳥屋横丁の西裏に在りたり。三段五畝十九步半なりしといふ。寛政十年塙檢校保己一の拜借地にして。其の著書羣書類聚の版木を收藏せる倉庫を建置きたるよし。此版木今や內務省の所轄に歸せり。明治後其の孫忠昭翁か政府に獻納せし迄。同家の拜借地たりしなり。此地は寶曆九年二九城修築の土取場となり。後ち不輸の地なりしが。天明四年二月名主鐵八冥加金を納めて其の地を領し。林成永錢を貢進せしが。寛政六年金澤瀨兵千秋指揮して畑成永と爲し其の數を陪加す。而して同十年に至り前記の如く塙家の拜借地となりしものなり。

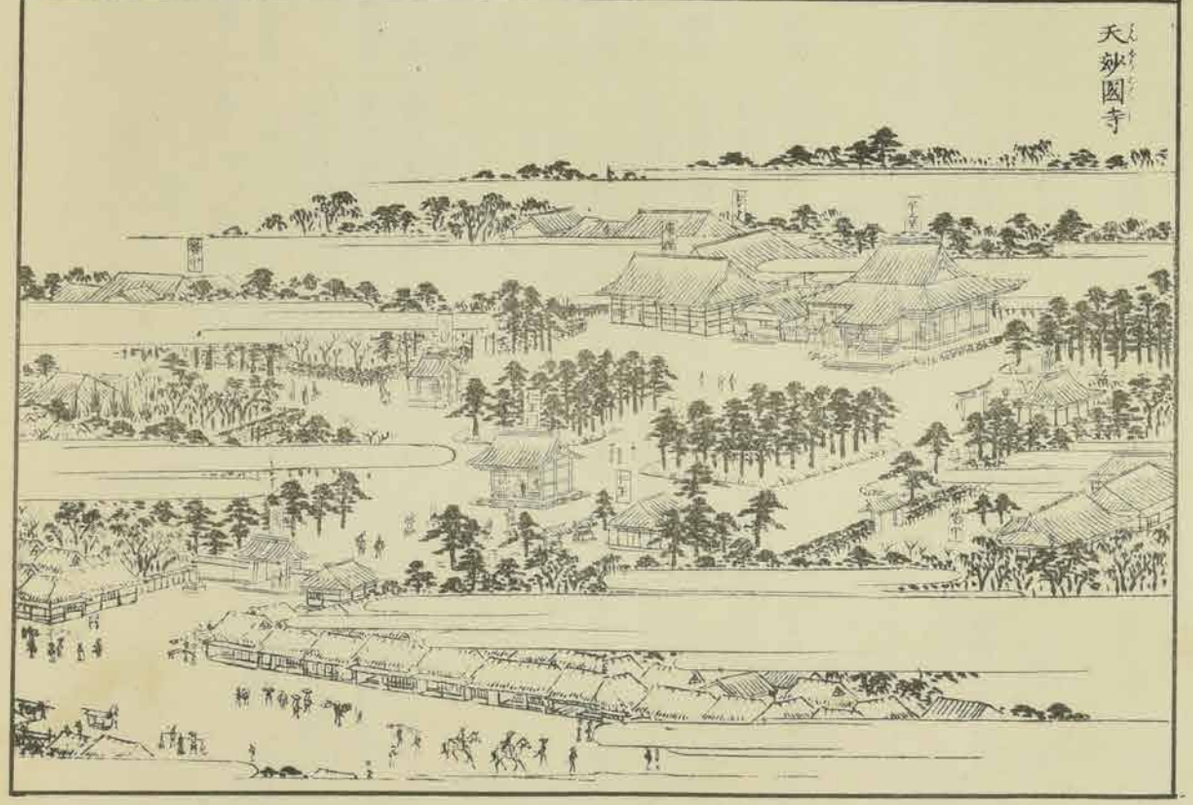
●品川公園　松本寒綠傳

品川公園は。北品川に在り。吉瑞岡卽ち天王山にて品川神社鎭座の地是なり。此處眺望佳絶にして崖上幾處踞床の配置あり。杖を停めて徐ろに遊觀すれば。品川灣の風景は總て寸眸の中に鍾る。八叉を待ずして詩歌天外より來らむ。

松本寒綠の碑は園內富士假山の中腹に在ること前編記する所の如し。寒綠は氣節の士なり。傳へざるべからず。今左に愛國叢談載する所の傳を揭げ之を表出す。

松本重信字實甫。稱二來藏一號二寒綠一。會津藩士重堅之第三子。少遊二江戸一。受二業古賀樸一。與二尾藤水竹牧原直亮川西潛等一相善。篤二信宋學一。識レ正嫉レ邪如レ辨二薰蕕一。爲レ人戇直有二忠孝大





○品川神社の舊神職

品川神社の舊神職小泉氏は舊家なり。祖先は佐々木の庶流宇田川太郎左衛門某の裔宇田川和泉守長清なり。長祿の頃豐島郡日比谷郷に住し。後も此地に移る。當時太田道灌長清をして品川の館に居らしむ。長清四世の孫石見守勝種。元龜天正年間當社の神職にて兼て北條氏に屬し軍役を勤む。其子二人兄出雲守勝定は家を繼ぎ。弟豐前定正は北品川宿の名主兵三郎の祖なり。勝定の子小泉出雲勝重。實は橘樹郡平村八幡社の神職小泉某の次子なり。文祿年中勝定養子として家を繼しむ。是より小泉を氏とせり。爾後德川氏の爲めに勉む。九世勝延に至る。弟三人あり。一は小泉大内藏と稱す。芝神明宮の神職たり。其の次は覺三郎其の次は清之助。兄弟四人父出雲勝永に事へて至孝なり。又勝延が妻「かよ」も善く舅に事ふ。因て文政八年三月寺社奉行水野左近將忠邦命を奉して。勝延に白銀十枚其の妻及ひ大内藏、覺三郎、清之助に各七枚を賜はりて之を褒賞せりといふ。

小泉氏は此の如く品川には古く緣故あり。且つ名譽の家なり。今の神職は本多氏なれば。小泉氏は明治に至り辭したるにや其の消息きかまほし。

●品川神社の什寶

假面二枚

一は國常立尊面と稱するものにして。六月祭禮の時神輿の上に掛く、赤黑色にて竪一尺一寸横七寸六分。

一は翁の面なり。四月十七日の神事及び六月六日の夜神樂に之を用う。竪五寸九分横五寸一分。古色掬すべし。

共に德川家康公の寄附。

鐵鉾一本

長一尺三寸三分。中心に慶長二年六月吉日。佐藤掃部左衞門と彫りたり。

神輿一

總朱塗、葵紋附、高四尺六寸、横三尺七寸。

慶長五年家康公寄附。東京案内には寛永中將軍家光寄附とあり。但別物にや。

神樂裝束法被　二領

青地金襴寄附同上。

同　五領

錦。元祿七年九月德川綱吉公寄附

烏甲　一頭

同上

五行神面並玉帽子

品川拍子神樂用。

右面　十一枚

太刀　二振

一は天國作一は宇多國宗。

菅原道實朝臣古畫像　一幅

筆者詳ならず。松平隱岐守寄附。

繪馬額　一面

狩野養信筆

●御殿山の名木と名井

御殿山のことは。前編に詳記したるが。名木と名井との記事を漏したれば。更にこゝに揭ぐ。

連理の藤　御殿山の中にあるよし古鹿子に見ゆ。何の頃にか枯れたるよしにて今はなし。

鐘鑄の松　御殿山の北界に在り。圍一丈。芝增上寺の洪鐘を鑄し跡なりといふ。此洪鐘は延寶元年（三百三十八年前）小普請奉行須田祇寛、神谷直重等董督し。十一月二十四日鑄成せり。昔時は松の並ひに信玄旗掛松とて古松ありしが。其の後枯たるよし。永祿二年（三百五十一年前）武田信玄品川寺邊を追捕せし事あれば。其の遺跡なるべし。

磯の清水　御殿山の麓鳥屋横丁（清水横丁ともいふ）に在り。往古は此邊までも磯邊なりしといへり。水質清冽にて旱魃にも涸るゝことなし。

梨山

御殿山の東麓をいふ。梨の大樹ありし故に名く。

澤庵のしるしの石はゆるがねど。ゆるぎ果つる世の中は。佛の舍とてのがれ得ず。かはりかはれる山の內。松風のみぞ。昔ゆかしき。

●東海寺

東海寺は北品川北馬場に在り。萬松山と號す。臨濟宗にして京都大德寺派の觸頭なり。もと朱印地五百石を領せり。

當寺は寛永十四年將軍德川家光公の創建せし所にして。境域四萬七千二百四十坪七合添地五百八十八坪を有す。同十五年十一月將軍の命に因り僧宗彭卽ち澤庵和尙入院の式を行ふ是を開山始祖と爲す。和尙乃ち歌を詠じて云。

盡せしな寺はにいはりつくは山
　　海となるまて君ヶ代なれは

堂塔壯嚴を極めしが。元祿七年三月二十七日火災に罹りぬ。其の冬澤庵五十回の法會あり。速かに落成し難きを慮り。天和三年早世せし淨德院殿（五代將軍綱吉公の息）の故殿を賜りて本坊と爲し。再建の工事を終ふ。幕府時代は損壞の際は官費を以て修理するを例とせり。

舊況

總門

海道の西側歩行新宿一丁目の町屋並に在り。兩楹の門二間初は南門の方のみ往來せしが。三代將軍屢々駐駕ありしに因り。便に隨て東方に總門中門等を建られたり。

中門

總門を入り北向の冠木門を經て中門に至る。兩柱の間二間。東に向ひ。東海禪林の額を扁す。故に額門と稱す。

光松

中門外の右松をいふ。三代將軍の名くる所なり。

山門

中門の內に在り。六間に四間。東向にて潮音閣の額を揭く。東叡山大明宮公辨親王の眞筆なり。中央に觀音を安す。立像長二尺餘。弘法大師の作。左右に十六羅漢及び準提觀音の像を列す。羅漢は運慶の作。觀音は慈覺大師の作。立像長各一尺七八寸許。

南門

南方目黑川の岸に在り。今の要津橋の北方なり。此門と佛殿との中央に冠木門あり。之をも中門と呼へり。

佛殿

六間四面にて東に向ふ。世尊殿の三字を扁す。是も公辨親王の眞筆なり。或は祈禱殿ともいふ。本尊釋迦坐像長二尺餘。脇士文殊普賢各長二尺許。印吉の作。

客殿

佛殿の西北に在り。七間半に十間。隆禮堂の額を揭く。天倫和尙の筆なり。中間には開山澤庵和尙が有名の一圓相の幅を掛け。其の前に後水尾院宸筆寂然の二字を扁す

北の間

德川家歷世の靈牌を安す。景福祠の額を揭く。公辨親王の眞筆なり。

御成書院

五間に十間。天倫筆延賓堂の額を表す。

法寶堂

庭上の池北に在り。二間四方にて南に向ふ。法寶堂の三字を扁す。是れ亦公辨親王の書し給ふ所。此堂はもと紅葉山に在りて家康公崇信の藥師を祀られしに。何の頃か三河國某寺に移され空殿なりしを。元祿七年當寺火災後造營を急がれし際。其の儘賜りしといふ。乃ち此堂を經藏として家光公筆東照宮の三字を神體とし。左右に幕府納付の一切經を置く。

鉤玄室

是も池邊に在り。家光公澤庵和尙と法問ありし所なり。

浴室

中門を入りて左方車門の傍に在り。五間に三間。天倫和尙筆香水海の額を揭ぐ。

鐘樓

山門に向て左に在り。二間四方。鐘銘左の如し。

武州荏原郡萬松山東海禪寺鐘銘弁序

在昔大猷明君於二東都萬松山一營二東海禪寺一。擧二前大德澤庵老宿一爲第一代一。乃寛永戊寅年也。老宿謝世後令下同門諸彥一輪流燒郷。宗忽亦會加レ員。若レ斯者積有二涼燠一。元祿己巳今之大君下レ令。俾二宗忽永充一住持職。壬申季春本庄因幡守藏原宗資朝臣价二端崖言公一來告レ言。粤有二功德主一不レ陽二其姓名一。特鑄二巨鐘一兼架二高樓一。以補二本寺闕典一。顒資二明君冥福一。而住持預做二銘詩一。宜レ備二功德主之觀一也。是忽之責無レ繇二辭謝一。銘曰

武州潭府　右虎左龍　百靈攸レ護　千祥攸レ鍾　先君剏レ寺　崇二奉心宗一　東方禪海　豐饒其封一　抵今休沐　鑪鯨架レ樓　簨簴高播　範摸二孔優一　聲二吾偉器一　翊二國大猷一　晌通二幽界一　脫レ縛逭レ因　五五列聖　觀音爲レ正　上機開悟　中機發省　下機焉依猿心趣定　聞レ之利益　是名究竟　喜捨者誰　人不レ知レ之　倘達二佛聽一　天知地知　陰德之報　三慧揚レ輝壽山岌嶪　福海渺瀰

現住嗣祖沙門天倫宗忽謹撰　幹事耆舊比丘端崖宗言掌職監寺比丘紹珂　冶工椎名伊豫良寛

元祿萬年之五歲舍壬申三舍良辰

參龍井

庭池の邊鉤玄室の東に在り。將軍啓行の際喫茶水に供用せしものなり。

宿鷺松

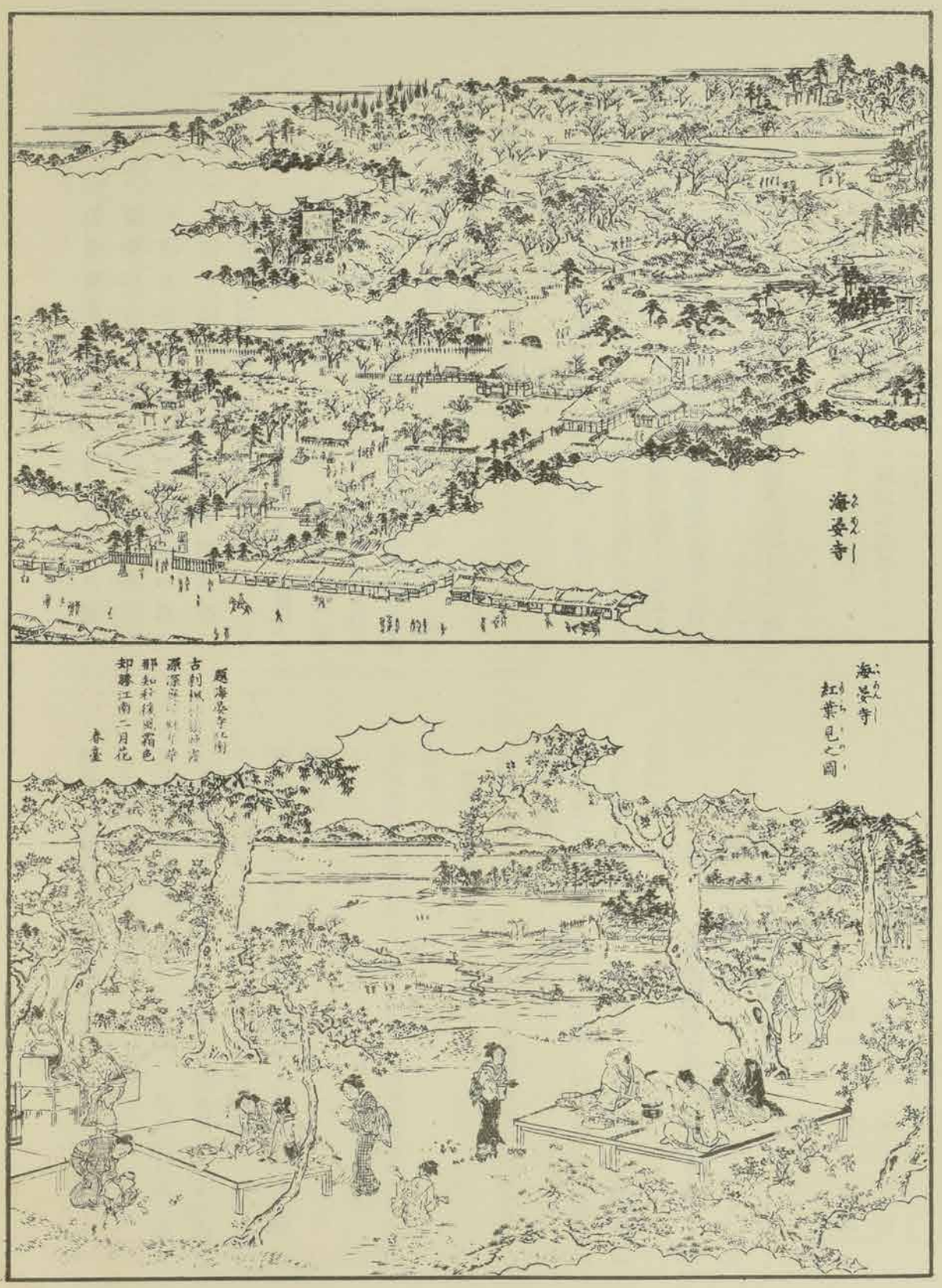
鉤玄室の傍に在り。後に枯たり。

萬年石

池の中嶼に在り。澤庵和尙の手記あり。左の如し。

萬年石記

今玆寛永癸未三月十四日偶左相府移二台座於此池沼下一。池有レ島。島有二幽石一。熟見レ之無二奇形怪狀一。不二端險挺立一。若由レ醉矣。栗里翁之石乎。或由レ醒矣。李德裕之石乎。皆不レ然。彼防風之朽骨乎。或於蒐之白額乎。共不レ然。唯突兀而在二草理一。痴兀而含二德容一。是世之求レ奇者未嘗知二此石之所一貴。偏得二恬淡虛無之趣一。而有二谷神不死之體一。如二至虛極一也。似二守靜篤一也。相君命二待臣一曰。此石不レ可レ無レ名。各以レ所レ思聞焉。於レ是諸子雖レ有二所思一。非レ無二所レ懼一。斟酌相半也。時小堀遠江守政一侍二茶爐下一。君有レ旨。政一卽起向レ石三呼二萬年石一。石三點頭矣。君下二佳言一曰。不レ疑是萬年石也。大度之一言以定二天下一。況於レ石乎。嗚呼石乎哉石乎哉。入レ于二台覽一。一旦發レ光而陟變二改其觀一。蓋萬之爲レ言也。未レ必可レ以二十千一而限レ。凡數者始レ一而窮レ十。始レ十而窮レ百。始レ百而窮レ千。始レ千而窮レ萬。以レ萬算則不レ知二機十百千萬億兆年一。以二此無窮



爲二石之壽量一。以二石之壽量一比二君壽山一。則累二華頂萬八千丈一猶在レ麓者耶。以レ世計則復不レ知二其幾萬々世一矣。村語以銘曰

重レ於二九鼎一萬年石　鈞命如レ驚豈可レ輕　和氣一團無盡藏　以レ秋送復以レ春迎　住山老衲澤庵宗彭　敬書

千歳杉

南門の内に在り古木は枯て蘖生を存す。

楓樹

境内に數株在り。毎秋賞觀の客多し。

塔頭

十七院の住職皆紫衣を許され。大德寺の末に列す。

玄性院

妙解院の南隣に在り。寛永十六年堀田加賀守正盛創建して。澤庵を開祖とし。春澤を第一世とす。初は臨川院と稱す。後ち正盛の法號を玄性院と改む。因て隨て改たりといふ

鐘樓　城内に在り。天明四年再鑄の鐘を掛く。

長松院

南の中門を入りて左に在り。桂昌院殿の創建なり。

妙解院

同所の右に在り。寛永二十年細川肥後守光尚。先祖越中守忠利の爲めに創建す。因て忠利の法諡を以て院號

とす。境内に細川越中守綱利の室本源院の墳墓あり

鐘樓　域内に在り。鐘銘左の如し。

妙解禪院鐘銘并序

院權二輿於寛永二十年一。維肥之後州前大守源光尚公爲二厥先考妙解院殿羽林次將忠利公一。經レ之營レ之以薦二冥福一。爾後今之少將兼越州大守綱利公善繼二其志善述一。其事一。會以二寛文丁未之年一。層構殿宇一。衛二護法道一。而檀庇有レ餘矣。今玆丁丑新鑄二大鐘一。懸二諸栒虛一。是所以警二昏昕一。齊令レ開二迷途一。疏レ幽滯レ也。因爲二之銘一。銘曰。

細柳營下　萬松山頭　中有二一院一　妙解禪筵　頂銅已鑠　法器玆全　二龍含レ瑞　九乳吐レ泉　隨扣卽應　受レ虛而傳　花晨月夕　定扉客船　凡有レ耳者　普被二明宣一　遠離二苦集一　洗二滌罪愆一　返聞聞盡　空覺覺圓　金剛三昧　功德無邊　所レ冀祖域　玄風永扇檀家福壽　億萬斯年

元祿第十歳舍丁丑春二月初十日賜紫沙門見住妙解大雲義休謹撰　冶工椎名伊豫良寛

今玆安永八稔歳次己亥夏四月十有八日今之羽林次將兼越州大守源重賢公之時革レ故者　現住妙解柯山宗椽謹寫焉　冶工西村和泉政時

雲龍院

東の中門を入りて左に在り。寛永年間の創建なり。

以上四院は澤庵和尚弟子の開基する所なり。

清光院

琳光院の北隣なり。境内に雲林院殿の墳墓あり。奥平大膳太夫家昌の女。寛永十五年六月十三日家光公の養女となり。堀尾山城守忠晴に嫁し。封除の後家に歸り。慶安三年閏十月二十六日逝去。當院は奥平大膳太夫、永井飛彈守、細川和泉守、及び織田氏の菩提所なり。織田信長、細川三齋の畫像を什寶とす、皆其の家より納る所といふ。

鐘樓　門を入りて右に在り。

清光禪院鐘銘並序

叢林之法器莫レ最レ於レ鐘。凡播二號令一警二昏昏一救迷拔苦。厥功不レ可二枚舉一。粤大檀越岡田氏豐前守善政之適夫人佐久間氏光祿太夫勝之之女高雲院芳林宗春大姉。發二信根一捨二淨財一而鑄二鼎鐘一。作二小樓一寄二之清光禪院一。以薦レ於二亡子諦當院玄峰宗參居士之冥福一矣。而後請二銘於レ予。因作レ銘曰。

新架二樓廡一　玆鑄二華鯨一　金精銅液
東柱西撐　彫鐫不レ窳　範圍中程
簨簴鐵索　或縱或横　暮雲曉月
緩擊緊鳴　及レ於二四裔一　震レ於二八紘
夢魂警覺　耳識澄清　李昇苦脫
實存膽驚　圓通無礙　靈應克誠
善利罔レ極　子孫繁榮

延寶第五丁巳年仲秋念七日

施主高雲院芳林宗春大姉　治工藤原椎名伊豫吉寛　前住德禪見住清光月庭宗柳撰

定慧院

長松院の北隣に在り。院號はもと安藤對馬守信義が先祖の法諡を取りて桂昌院と號せしが。後ち彼の桂昌院殿の法號を避て之を改あたり。

鐘樓　門を入りて左に在り。山城國東禪寺の鐘を掛く。其の由來詳かならず。

春雨庵

少林院の東隣に在り。澤庵和尚の草廬を移せしものなりといふ。

御靈社

背後の丘上に在り。域内の鎮守なり。長一尺四寸幅三寸餘の木板を以て神體とす。當時門前海岸に流れ來りしを收めて祀れりといふ。此丘を景政家と稱す。即ち鎌倉權五郎景政の墳墓なりと傳ふ。遙拜の爲めに築きしものならむといへり。

鐘樓　天明六年の鐘を掛く。

慈雲庵

法雲院の隣に在り。醫員武田氏之を開基す。後ち廢院となり。寺務は定慧院にて進退せり。

少林院

春雨庵の北隣なり。細川家の創建せしものに係る。

師聖院

西門を入りて左に在り。元祿年間天倫和尚隱栖の處なり。後ち遂に一院となる。初は勝幢院と稱せしと。

鐘樓　天明八年再鑄の鐘を掛く。

觀音堂

門內正面に在り。方二間。觀音淨聖禪院の六字を扁す。公辨親王の眞筆なり。正觀音立像長二尺五寸。運慶の作。享保年間の緣起に桂昌院殿の創建とあれど。再建ならむといへり。

法雲院

定慧院に隣す。定慧住僧隱栖の處なるを以て住僧なく。同院に於て之を管理す。境內に赤松圓心の墳墓あり。後世子孫の建る所。又寺寶に波平行安作の太刀一振（長二尺八寸）小刀一口、弓一張ありたり。其の裔赤松八兵衛某の寄附なりといふ。

琳光院

南門を入りて右に在り。當院も住僧なく淸光院の所管たり。小鐘あり。蓋し軍陣用のもの或はいふ朝鮮より來れるものと。高一尺六寸徑一尺一分厚一寸二分。又境內に千利休の墓あり。後人の建る所なり。

眞珠院

同所に在り。元祿十五年創立。初は蔭涼院と稱せしが。奧平大膳太夫昌能の女眞珠院歸依に因りて其の名を改むといふ。

鐘樓　享保十四年新鑄の鐘を掛く。

高源院

額門を入りて右に在り。有馬家の創立する所。開基は養福院高源宗隆大姉。開山は法忍大定禪師とす。

瑞泉院

淸光院の前に在り。住僧なく長松院之を所管す。

泰定院

法雲院の西隣に在りたり。是も住僧なく。玄性院の所管に屬せり。

白雲庵

師聖院の向ひに在りたり。

以上序するが如く。十七字の塔頭列峙し。境域甚だ濶く。川に枕み丘を負ひ。茂林脩竹幽邃を極め。實に禪心澄徹に適する一大伽藍たり。當時當山の十境と稱せしもの左の如し。

潮音閣　法寶堂　浴鳳池　慈蔭塔　豢龍井　鉤玄室

豁夢樓（鐘樓）　要津橋　千歲杉　萬年石

現況

柳營廢せられ江戸の花散亂せし以來。當寺も亦其の波及を免れず。今は落々たる長松は僅かに其の餘影を留れども。全く禪林の舊觀を失し。故老をして嘆嗟せしむるに至れり。卽ち明治二年東海鐵道設計の爲め。建築物は勿論境內の全部を變更し。同四年品川縣移轉に際會し。本坊を首め塔頭の大部分は收用せられ。僅かに東海寺の名稱を某塔中に留めたりしが。再遷して舊玄性院を以て當寺とし。以て今に至る。

表門は西面し。門內に鐘樓あり。本堂には釋尊及び文殊普賢の像を安置し。後水尾天皇の宸筆「寂然」の額を揭げ。澤庵和尙が一圓相の幅を掛く。又舊山門の「潮音閣」三大字の額は之を方丈に揭げあり。是は前項に記せし如く公辨親王（後西院天皇第六の皇子）の御筆にて。原本は一軸として當寺に保存せり。

方丈の前栽に花壇あり。牡丹花二三百株を培養す。奇葩多きを以て晩春は來觀者踵を接すといふ。嗚呼寺門舊觀に復せずして獨りて〻に富貴の花を見る。誰か感慨せざるものあらむや。

今左に存在せるものを記すべし。

浴鳳池

此池は澤庵和尙將軍家光公と共に鍬を執て親しく鑿開せしものにして。海軍用地中に現存せり。

豢龍井

是も海軍用地中に在りて。軍艦飲用水に供せられしが今は知らず。

萬年石

現東海寺の庭園內に現存せり。

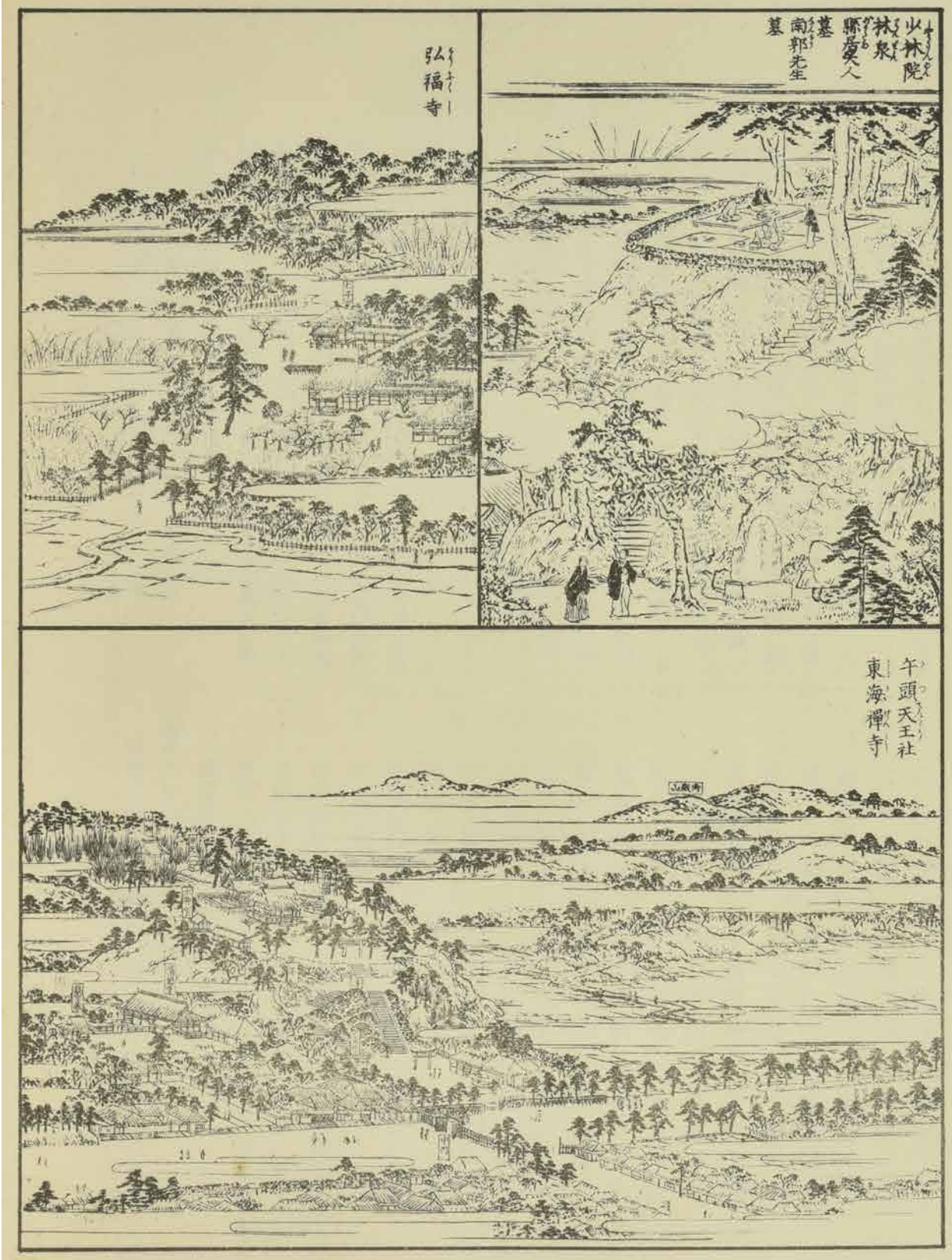
澤庵和尙の墓

俗に大山と稱する當寺の總墓地に在り。二間四方の石垣を環らし。墓標として一大圓石を置きたるのみ。石には一字をも刻せず。是れ其の遺命なり。かく墓標に天然石を用ゐしは。和尙の發明せし澤庵漬の壓石に因みしといふ。入寂は正保二年十二月十一日なれば。毎年此日當寺に於て供養す。

風土記稿に云澤庵和尙墓西の丘上にあり。臺石の上に一丸の天然石をのせ。廻りに石籬あり前に碑石を立て左の文を刻す。

開山澤庵和尙塔銘幷序

昔者南浦明公正元間蹟南遊棹入二大宋國一。徧歷二諸老一。時虛堂祖翁主淨慈往謁レ之。參禪大徹。終提二堂之正印一歸二于本朝一。而啓迪作レ家。爐二鞴陶冶天下學者一。入二其室者一千有餘人。嗣二其法一者以二十有五一數計。若二興禪大燈國師一其一人也。國師入二萬鍛洪爐一。恰似二精金無二變色一。得二證明一而



後閱二十之寒暑。竪起大法幢。炫耀于朝廷山林。自爾以降燈々相續明々不レ盡。方今挑其焰。昭其化者澤庵禪師也。師諱彭冥之其自謂也。晩稱東海暮翁。天正初元生於但州出石縣。平氏。少受僧業於邑之宗鏡禪寺希先西堂。西堂授法諱曰秀喜。年十有四而祝髮。探頤於竺墳。索隱於魯典。每聞先之道諸有徧詢之志。先逝而去。龍寶山大德禪寺董甫仲公居宗鏡丈室。師方啓叩。及仲公歸大德。師乃參隨至彼奥。改諱師彭。仲公赴江左瑞岳寺。師與之東行矣。仲公蛻而後還本寺。依大寶圓鑒國師請レ益。亦周旋于山中諸老間。多獲言論風旨也。師貧窶而無一鉢之資。只俊永于法喜禪悅而已。一朝飛錫乎泉南。就文西西堂酌文字流。文西是黃龍派下頭角而尤老文學者也。西臨終焉之期以所貯之典籍附師。初雲英偉公玉甫琮公以法器期師招之弗就。明堂古鏡禪師一凍滴公住邑之陽春庵。師亟見之。機辨縱橫應答如響。實透網金鱗而頓彎青驪也。鏡移同邑南宗寺。師執侍巾瓶。日夜參究。鏡知師有所契悟。授印證語號曰澤庵。賦祇夜抒其義。師命畫匠寫鏡壽像索贊。鏡涉毫書曰。麤而易描中眉難寫。平素作略入魔界。而還降魔宗。活機自由。入佛界而能殺佛者快。拂子突出云。父攘羊隱之底不是彭禪子麼。予失笑云。何不問太平天下。師領之珍襲寶護。同邑有宗無著爲先考齊緇侶。殊請圓鑑國師入レ

室。師之酬對敏捷而玉轉珠回也。此時鏡臥病于陽春。聞師勘辨而驚異嘉嘆。云眞跨竈兒也。於鏡歿也師首衆陽春補席。慶長丁未師年三十有五。遷本寺拔首繼臨德禪。同年秋八月主龍興山南宗禪寺。經二年而入院于本寺大德。一香爲古鏡供。住山綽有古人風味。亡何告退還于泉南。泉南緇素郊迎驩喜。如見古佛。同邑有宗印者創建一庵名曰祥雲。延師爲開山祖也。師唱法語慶之贊之。于泉南于龍峰。視其去留知其輕重。陽明殿下信尹公一夕入師禪室問道。詰旦馳書謝之。癸丑一新南京之鐘樓。甲寅再造大德之拾雲軒。師禪座之暇編大燈年譜。收在雲門庵。乙卯南宗罹鬱攸之災。師告邑宰相攸於邑之南。再建南宗。不亟不徐。尋復舊觀。師視名利若塵埃。視聲色若泡幻。有時在泉南之下邑。愛幽邃深靖。有時寓南京之芳林庵。韜光匿輝。有時入泊瀨勝概。抱煙霞沈痼。有時僑城州之妙勝寺。守空寂生涯。爾後歸山陰之古里。構一把茆於宗鏡主山之下。扁投淵軒。折脚鐺內煮麻麥粟豆。給日食而無有飢色。寛永己巳師有事與玉室翁同貶于窮鄉遐陬。然師知其行止係數不變容色。壬申幕下降鈞命召還二翁。師抵武陵。於城外一牛鳴地。卓庵曰檢束。暫寓止焉。幕下徵師於營中。問法要。眷遇優渥。道望愈高。戊寅秋師之京師。太上皇召入

仙院ニ講ニ原人論一。辯瀾激起如レ懸ニ江河一。皇情大悅。師奏
我山第二世徹翁唯有ニ禪師號一無ニ國師號一也。願下ニ綸旨一。
上皇允レ之。主章寶墨不レ日而下。謚ニ天應大現國師一。有レ
功ニ于曩祖一若レ此也。幕下於ニ金城南品川一創ニ草梵刹一。使
師住持一。山曰ニ萬松一。寺曰ニ東海一。落成之後賦ニ賀頌一致ニ
薦祝一。厥後臺輿入レ山。草木生レ輝。師奉ニ鈞命一賦ニ和歌一
首一。祈ニ國基之鞏固一。識ニ新筑之久昌一。辛巳歲降ニ使本寺一。
出世制法復ニ舊規之鈞命一。蓋依ニ師之所願一也。有功ニ于本
寺一其可レ知也。正保乙酉夏令レ畫師劃一圓相一。相中親加ニ
一點墨一。書ニ于贊詞於ニ其上一。以爲ニ壽容一。同年仲冬示レ
疚。豫知ニ緣盡一。遺誡云。瘞ニ全身於後山一。莫ニ誦經設齋一。
莫レ受ニ道俗弔賻一。衆僧著衣喫飯如ニ平日一矣且莫レ爲レ求ニ
謚號一而煩ニ朝奏一。莫レ入ニ木牌於本寺之祖堂一云云。彌月
不レ痊。一日曉天援レ筆書ニ夢一字一。泊然而逝。實十二月十
一日也。世壽七十有三。僧臘五十有九。瘞ニ全身於東海之西
北岡一。唯種ニ松乎其上一不レ樹レ塔。蓋依ニ遺命一也。門人在ニ
泉南一者祥雲樹レ塔。名曰ニ寂然一。曩昔參學弟子武野安齋翁
往年具ニ師行實一。求レ銘ニ其塔一。因循未レ果。今玆責レ之不レ
已。講ニ習道義於乃師一者莫レ若レ余也。於レ翁亦然。故不レ揣ニ
蕪陋一。聊記ニ蔓乙一。遂爲ニ之銘一曰

虛堂正派　流入ニ日東一　疏レ之鳴者
太應圓通　眞子嫡孫　大燈大現
開漏和門　且要ニ鍛練一　經過十世
古鏡生レ輝　圓陀陀地　路絕人稀
師扣ニ其室一　覿面相呈　銜樓跨竈
盛大光明　道播ニ四海一　眼空ニ諸方一
拔ニ濟群有一　東海舟航　契矩疊規
眞履實踐　堅抹橫該　栗棘金圈
一圓相中　爲ニ筆頭點一　英姿逸群
纖塵不レ染　淵才泉湧　笑語春溫
老拳謹握　大座當軒　語而明矣
默而寘レ之　負ニ荷大法一　扶レ顛持レ危
橫機峭峻　矜子一闕　萬松嶺上
誰敢窺攀　姑射山裡　對御談玄
祥雲覆蔭　塔曰ニ寂然一　既息ニ幻景一
呼喚不レ回　如如正體　無去無來
作ニ爲此銘一　愧ニ愧庸昧一　德業長存
天覆地載

右泉南祥雲禪寺寂然塔銘幷序五山之上瑞龍山太平興國南禪寺主持僧錄司最嶽元良和尙所レ撰也

寶曆三年癸酉冬十二月十一日謄寫以立レ於ニ萬松山東海禪寺慈蔭塔下一現住開田義問併拜書

贈從五位加茂眞淵先生の墓

澤庵和尙墓の隣地に在り。先生は縣居と號し。岡部衛士

と稱す。國學の泰斗なり。明和六年十月三十日卒す。年七十三。法名玄珠院眞淵義龍居士。石の鳥居を建て甃石路を設け。墓標には八角形の石を置たり。

服部南郭先生の墓

同地に在り。先生名は元喬字子遷小右衛門と稱す。徂徠翁の高足にして其の學術は世の知る所なり。寶曆九年六月二十一日歿す。年七十七。

舊塔頭十七字中現存せるものは。左の三字のみ

清光院　春雨庵　高源院

●京濱電氣鐵道

東京南郊の勝地を探り一日の清遊を試みむと欲する者は京濱間往復の電車に乘るを便利とす。電車は品川步行新宿の入口に發着所あり。卽ち品川驛にて間斷なく往復す。

昇降者の爲めに停留場並に附近の遊覽地を案內すべし。

○北馬場（きたばんば）

品川神社　東海寺

○南馬場（みなみばんば）

荏原神社　妙華園

○青物横丁（あおものよこちょう）

千體荒神堂　淺間臺　權現臺　品川座　恩賜館　伊藤公墳墓

○鮫洲（さめず）

海晏寺　川崎屋　八幡神社

○海岸（かいがん）

鈴か森　濱川神社　旭松庵　磐井神社　海水浴　砂風呂

○大森驛（おおもりえき）

八景園　大梅園曙樓　本門寺　千束池

○山谷（やまや）

森ヶ崎鐵泉

○梅屋敷（うめやしき）

蒲田梅屋敷　蒲田菖蒲園

○蒲田（かまた）

穴守神社　體育倶樂部大運動場　羽田鞭天社　大師の渡

○六郷土手（ろくごうどて）

古川藥師　矢口の渡　新田神社

○川崎（かわさき）

平間寺　大師公園　大蛇丸地黃坊酒合戰の舊蹟

○市場（いちば）

市場觀音　末吉不動堂

○鶴見（つるみ）

二見臺　總持寺　手枕阪　駒岡の瓢簞山　子安觀音

○生麥（なまむぎ）

生麥の碑

○子安（こやす）

浦島塚

○仲木戸（なかきど）

小机の古城　横濱鐵道の起點驛は此停留場の前に在り

○神奈川驛（かながわえき）

京濱電氣鐵道の終點なり。横濱電車ありて驛より横濱に入る。

高島山　本覺寺　豐顯寺の櫻

こゝに京濱電氣鐵道の沿革を叙すれば、初め大師電氣鐵道と稱し、川崎電氣鐵道、横濱電氣鐵道の兩發起者合同し、明治三十年六月川崎と大師堂間に電氣鐵道軌道敷設の公許を得たるを起原とす。翌三十一年六月軌道の敷設と發電所新築の工事に著手し、架空單線式四呎八吋の廣軌道とし、三十二年一月竣工して、同月二十一日始て車輛を運轉す。線路一哩十鎖にして、實に關東に於ける電氣鐵道の嚆矢たり。是を第一期と爲す。

三十二年十一月六郷橋品川橋間に於ける延長線の公許を得。翌年九月より先づ六郷橋より大森官線驛まで四哩七十鎖の軌道敷設と發電所の增設、配電所の新築工事に著手し、三十四年一月竣工して二月車輛の運轉を開始せり。是より先き六郷橋大師堂間の單線を改て複線となし、三十二年十二月開通し。更に大森延長線の竣工と共に蓄電池を利用し、大森町附近に電燈營業を開始す。是を第二期と爲す。

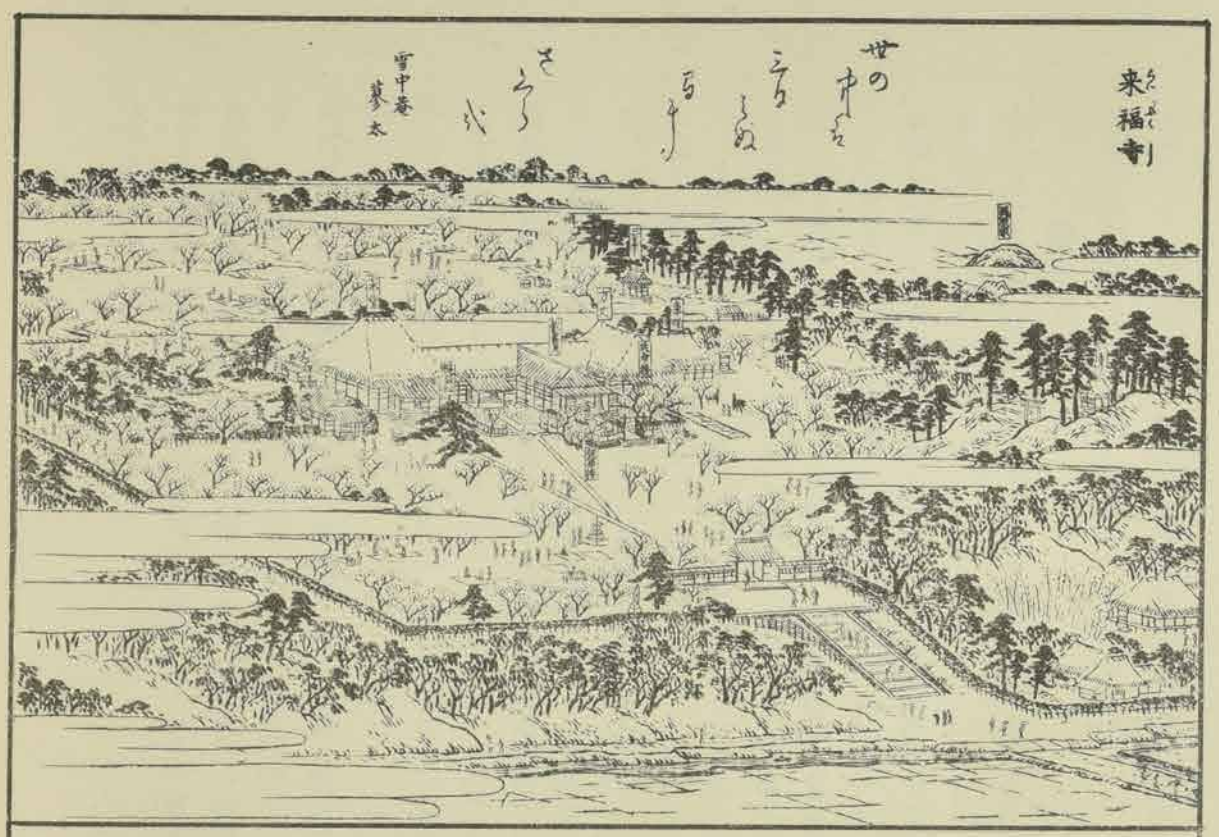
三十三年十一月川崎神奈川間の線路延長、翌年十月羽田支線延長の公許を得、先づ羽田支線及び六郷橋川崎官線驛間の延長工事に著手し、羽田支線は本線蒲田驛より分岐し、一哩七十鎖。六郷橋川崎官線驛間は五十鎖にして、三十五年九月竣工運轉を開始す。是を第三期と爲す。

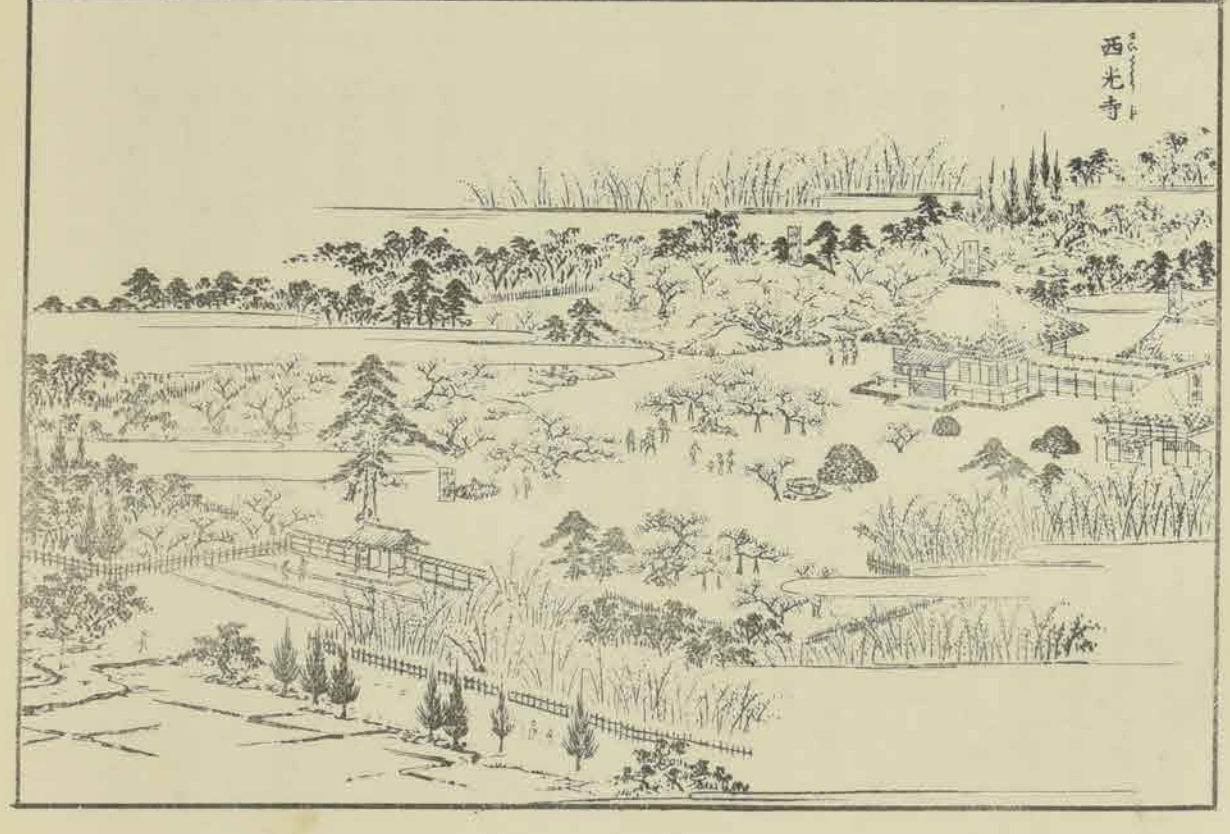
其の後著々工事を進行して、三十七年五月大森品川橋の軌道竣工し、同月八日車輛の運轉を開始して第四期の工事を終り三十九年十二月川崎神奈川間の工事成り、同月二十四日運轉を開始して第五期の工事を全ふし、品川より神奈川に至る十三哩十六鎖の軌道遍く貫通するに至れり。」此の京濱電氣鐵道株式會社は神奈川縣橘樹郡川崎町堀之內八百三十一番地に在り

●常行寺

常行寺は南品川四丁目の西側に在り、熊野山と號し、報恩院と稱す。天台宗にして東叡山の末なり。（昔は延曆寺の末）

> 慈覺大師の伏鉦に、念佛の聲の常行寺、千年前の古刹とは、知らでや人の過ぬらむ。





當寺は慈覺大師嘉祥元年(千百二年前)の開基にして、第七世惠心僧都長保年中(九百十餘年前)住持たり。されば關東の古跡にして、武相兩國の檀林末寺五百箇寺に餘れり。目黑不動の像も元は當寺護摩堂の本尊。別當瀧泉寺は末寺なりしと云。(瀧泉寺には此傳なし)。鎌倉時代は若干の寺領もありしが、後年次第に衰微し、文安元年(四百六十七年前)大永六年に至るまで八十一年間は、住僧もなく纔かに寺號を存するのみなりしが、同七年實海僧正古跡の將さに絶なむとするを歎き。力を盡して舊觀に復せり。是を二十九世中興開山とす。爾後連綿し、慶長年間江戸城中天台論議の時三十六世蓮海之に列す。此頃檀林にて寺格よろしかりしが、東叡山創建の後檀林を止らる。又往古は寺地大井村に在り。承應二年住持靜尊の時こゝに移し、輪奐の美を盡せしと云。大井の遺址後に松平土佐守忠豐の下屋敷となりぬ。寶永の頃當寺頻りに火災に遇ひ、記錄什物多く烏有に歸し、享保年間に至り堂宇を再營せりといふ。

寺寶には水晶珠數一連(慈覺大師所持の物と云)伏鉦一面(慈覺大師常行三昧念佛執行の時使用せし物と云)慈覺大師像一軀(自作なり坐像長八寸)地藏尊一軀(石像弘法大師の作といふ一尺三寸)三尊阿彌陀各軀(惠心僧都の作と云立像長一尺)五鈷一握(兜率覺超の所持せしものと云)古幡一旒(表は赤地金襴裏絹と見ゆ長四尺餘幅一尺七寸餘幡の角に紙にて當山末門五百七十餘ケ寺官軍へ御加勢の幡と申傳來り候古門前より出ると記して縫てあり。何の頃のものなりや詳かならず)其の他數點あるよし。

●妙華園

妙華園は南品川の西部に在り。山手電車線大崎停車場より南へ約五町、京濱電車南馬場停留場より西へ約七町。園は明治二十八年の創設にして、地積五千餘坪を有し、四棟の溫室と二棟の陳列室等を設け、百花嫣然として四時春の如し。牡丹、躑躅、藤等は一月下旬より已に開花せしむ。速成の尤なる者は睡蓮。香蓮其の他西洋草花と灌木類なり。地方園藝熱心家の爲めに、郵書注文部の設あり。又盛に外國種子商との取引を爲し、且つ見習生を徵して栽培の方法をも授く。

園内には高丘あり水園あり。女子の運動場あり。休憩所ありて、來遊者の需めに應じ手輕なる飲食物をも供す。

●池上道

池上道は、南品川二丁目三丁目の間を西に折れて行く道をいふ、池上本門寺等に達する進路なり。此道は天龍寺門前より更に南行するものなるが、若し西に直行すれば大崎町の内桐ケ谷方面に出づ。

●淺間臺

淺間臺は二日五日市の南界に在る高地にして、新築の家各所に散在し、北方は南品川等を俯瞰し、御殿山を望み。眺望殊に佳なり。東北に下る阪を仙臺阪といふ。阪上に元祖仙臺味噌製造所などあり。

●品川海岸の石垣

芝車町より品川鈴ヶ森に至る海岸の石垣は、承應年間久世大和守台命に因りて工事を施したるものなりといふ。

●本光寺

本光寺は南品川馬場町に在り。經王山と號す。京都妙滿寺派の觸頭江戸三ヶ寺の一なり。

永德二年日什上人の草創する所にして、上人は明德三年二月二十八日を以て寂し。後ち二位僧都を贈らる。寛正六年十一月十九日品川の領主上總前司沙彌道扶、隨應庵跡敷地を當寺に寄附せしことあり。又當寺の住持日碗上人文明八年丙申六月二十日鈴木入道に贈りし書に。馬場地替代に本光寺地進置事東者其方之界横西は法藏寺界、南は善仲寺界、北は妙行寺界、此分永代進置事云云と見ゆ。其の他大永四年正月十三日北條氏綱上杉朝興と高縄原にて合戰の前日、こゝに著陣せし時制札を建て、軍勢甲乙人等の當寺に於て濫妨狼藉を爲すことを禁したるを首め、天文二年八月、同十年十月、永祿三年十二月等同樣の制札を建しことあれば、其の古刹たるを知るべし。

門には經王山の大額を掲ぐ。門の結構觀るべし。是は舊中門ならむ。門内敷石ありて左右に松櫻を散植す。東に鐘樓あり。元祿三年新鑄の鐘を掛く。昔時の鐘は天正年間北條氏の兵持去て岩附の城に置きしが、後ちに所在を失ひしといふ。銘文左の如し。

武州荏原郡品川鄕經王山本光寺者。人皇百代後圓融院御宇永德壬戌日什上人開二基之一也。向日什道既成而朝二京師一之日。勅允二昇殿一。時謂二傳奏鷹司中將一而謹奏二我宗之利益一。帝感二其說一新詔二二條攝政大樹源義滿一。使三上人致二寶祚長久之禱一。妙典圓滿之勤莫レ有二怠慢一也。不二亦偉一哉。於レ是郡國建二當流之末派一。所謂體用六箇寺是也。且如二當寺一者爲レ用之長者也。自三義滿公一以還武家之御敎書莫二世而不賜焉。以歷三三百年一也。往昔天正北條亂。師旅經二過當寺一。鳧鐘入二岩付城一而沈滅也。自是以後滿宇頹轉久矣。二十二世住持權大僧都日禹上人法風復盛。衆廢悉興。檀越宗救爲レ當二先考三十三回忌一。兼願二九族一元登覺路一。新鑄二九乳一。寘諸堂前一。庶哉此聲遠近而聞レ之者開二衆蒙一發二深省一云。先考佛禮院宗救曰□（萬治元戊戌年六月十五日）先妣松德院妙貞日善（貞享二乙丑年七月十一日）伯兄收玄院宗隱日要（天和二壬戌年七月二日）叔兄遍善院日行（延寶四丙辰年九月三日）右四位爲レ欲レ各佛松尾座牌前每月直二其日一具二香華茶飯一無退轉者也。願以二此功德一普及三一切我等與二衆生一皆俱成二佛道一。于時元祿三庚午年林鐘望施主樋口宗二敬識

品川問答舊跡

客殿西北の方に在り。寛永十九年二月十六日將軍家光公此邊啓行の時、當寺に入り、扈從せる增上寺の意傳和尚をして住僧日啓と念佛無間業の問答を爲さしむ。意傳其の理に屈せしといふ。僧徒之を傳へて品川問答といへり。時に近

侍せしは酒井讃岐守忠勝、堀田加賀守正盛、朽木民部少輔植綱、東海寺澤庵和尚等なり。其の跡に古松ありしが枯て更に之を植。稱して問答舊跡の松といふ。

舊塔頭の清光院は現在せり。

●大龍寺

大龍寺は本光寺の西鄰に在り。瑞雲山と號す。黄檗派にして宇治萬福寺の末なり。往昔は明王院東光院と稱せし時宗の古刹なり。寛正四年の創立にて、開山は北品川長德寺開山覺阿なり。故に長德寺歴代の隱栖所と定めありしが、後ち衰微して法燈將さに絶なむとす。元禄十六年檗僧百泉本寺藤澤清淨寺に請て奉行所に訟へ、許可を得て之を讓受け、隱元禪師の弟子慧林を請て開山とす。此際協力して開基せしは藤堂伊豫守良直なり。良直法號を大龍院といふ。因て寺に命ず。本尊釋迦觀音勢至は共に坐像三尺唐佛なりといへり。

星野東碑

門内正面に在り、征露の役鴨緑江の戰死者なり。選文は大庭景陽にて、明治三十九年六月建る所に係る。

●天龍寺

天龍寺は大龍寺の南隣に在り、瑞雲山と號す。曹洞宗にして駿河國有度郡大谷村大正寺の末なり。

開基は越前宰相忠昌卿の母堂清涼院なり。（寛永十七年七月廿七日逝去）開山は一底永見和尚（慶長十八年十二月三日寂）

風土記稿に寺僧云。下谷天龍寺は昔此寺の出張所なり。其故は品川より御城迄程遠をもて、下谷に於て一寺を建。住僧其所に居召に從て登營せり。因て彼寺も天龍寺と名く。されば强ち本寺ならねども、後は下谷天龍寺住職替る毎に當寺より其人を選で公に願ひ、許を得て本寺に達すと云。下谷天龍寺の傳に、天正九年永見品川の天龍寺を創建せしが、東照宮御時二世嶺育に歸依し給ひ、屢々召れて拜謁す。老僧遠路の往來に堪ず、御城近邊にて寺地を賜ん事を願上、慶長十五年湯島にて替賜り、元地は無住に等しかりしを、國府臺總寧寺哲尊在府の時宿寺とし、後遂に其弟子寶鈿して住せしむ。後に轉して今の地に移れりと云。斯兩寺の傳區々なれば今姑く並へ記せり。

門に蒼龍崛の白字大額を掲ぐ。前大德現東海建宗書と署せり

門内左右に梅林あり。石路を進めば本堂正面に在りて東向す。屋上棲鳩谷々の聲を聞く。堂南に天然桑原先生頌德碑あり。明治四十年三月建る所なり。

寺寶に屏風二雙あるよし。一は唐玄宗楊貴妃の圖にて、古法眼元信畫。越前家の寄附なりといひ傳へ、此畫に就き奇怪の說ありといふ。一は鷹の圖にて探幽守信筆。一は土佐家の畫尤も古色ありとぞ。今尚ほ現存せるや否。

●海藏寺

海藏寺は南馬場町の南側に在り。深廣山と號し、無涯院と稱す。時宗にして藤澤清淨寺の末なり。永仁六年遊行二祖他阿眞教創立す（眞教は元應元年正月廿七日入滅）妙國寺永享六年の文書に、荒井道場とあるは當寺なるべしといへり。

墓域内に頭痛塚と稱するあり。舊非人頭松右衛門上請して、元禄年間より刑人の首を爰に埋み來りしといふ。土人頭痛を患ふる時、祈れば驗ありとて塚の名とす。

●公廳學校會社

前項に記入せざりし南北品川に於ける公廳學校會社は左の如し。

東京區裁判所品川出張所　南品川
品川警察署　南品川二二四荏原郡一圓を管轄す
荏原郡品川役場　北品川
北品川郵便局　品川歩行新宿一〇三
品川郵便局　南品川二一六
品川町品川小學校　北品川
品川銀行　北品川、明治二十九年六月六日創立
帝國貯蓄銀行品川支店　南品川
品川白煉瓦株式會社　同上、明治三十六年六月創立
明治護謨製造株式會社　要津橋南詰
三共會社品川製藥工場　北品川目黒川北
日本ペイント製造株式會社　南品川明治三十八年十月創立
日本乾電池製造株式會社　同上

劇場品川座　淺間臺下

○鈴木道胤の舊蹟

品川にて有名なりし、鈴木道胤居住の舊蹟は、南馬場町の邊ならむといふ。馬場の名は其の調馬場たりしより起りたるよしにてかく傳へたり。風土記稿に云、按ずるに妙國寺藏文明八年六月二十日本光寺住持日曉鈴木入道に與ふる書に、馬場地替代に本光寺進置云々と載たり。此道胤及び其子光純心を合。大檀那として妙國寺を中興す。同寺文安三年の鐘銘に大檀那沙彌道胤とあり。又寶德二年足利成氏の文書に、品川の住民道胤藏役事免除する由載す。見聞集に云。品川に五重の塔（妙國寺の塔なるべし）あり。里の翁語りけるは、昔鈴木道印といふうとくの町人立たり。幸純と云息ありて、（按ずるに道印幸純と書たるは文字の誤にて、道胤光純を正とすべし）父子連歌の數奇あり。其頃都に權大僧都心敬と云連歌師あり。道印父子と知音なり。心敬と道印父子殊に知音なれば。品川にては毎年心敬の下を待つ。京にて心敬は秋來るをおそしと急ぎ品川へ下り、明暮連歌をせられたりと語る。我聞て道印父子七堂伽藍を建立し、福德の驗見えたり。さて又連歌數奇と云しかど、下手故にや道印とも幸順とも名付たる發句附合古き文に一句もなし。其頃都に其名聞えし連歌師專順、智蘊、宗祇、紹永などあり。心敬京にありて右の連衆とは詠

吟なく、東のはてなる品川の鈴木を懷ひ、年々遠國の山を越え海を渡てはる〳〵來ぬる旅衣心敬の所存はかりがたし云々。又云昔江城に於て千句あり、連衆は心敬、宗祇、元祐、道印幸順、卽幸なり。開頭の發句に幸順

春も來て歸らん雪の朝かな

とせられたり。さて又幸順はいかい數奇にやありつらん。反古の裏に書殘したる附合あり。櫻井元庵都へ上り下向に品川幸順宿へ立より給ひき。此人上りにはまづしき體なりしが。衣裳いちしるしかりければ、幸順出逢興して

あやしやおほん身誰にかり衣

といへば、

この小袖人のもとよりくれはどり

とやがて元祐附たりとあり。川越千句の作者に鈴木長敏と云人見ゆ。是道胤が一族などにや、永祿十二年武田信玄品川の宇田川石見守鈴木等を追捕せしこと小田原記に載たり。此等に據て舊より當所に住せし豪家なること知るべし。今子孫斷絶して知るものなし。

○心敬僧都の庵蹟

前項に見えたる權大僧都心敬の庵蹟は詳ならざれども、鈴木道胤が居住せし近邊なるべしといふ。同書又云、僧都は近江國志賀郡三井寺の僧徒なりしが、連歌の達人にて其名世に聞えたり。川越の城主太田道眞同道灌等招により、當國に下り爰に寓居す。心敬が記に云。武藏の品川と云る津に至り侍り。名ところども見侍てやがて歸洛の事など思なしゝに。世の〳〵中の亂いよ〳〵の事にて、今は筑紫のはて吾妻の奥までも騷しくなりぬれば、ひたすら便を失ひ、たのまぬ磯に藻しほの草庵を結び、見馴ぬ海士に波の枕をかはす、かりねの夢の中に五年までたゞよひ侍るに、あまつさへ東の亂頻になりて、互に弓胡籙のみの喧しさま〳〵。さながら刀山劍樹のもとゝなり、旅の憂ます〳〵身をきるごとくなれば、いかなる岩のはざま氷のむしろにも、しばし心をのべばやと尋入侍るほどに、相模の奥大山の麓に星霜久しき苔の室あり云々。僧都相州に居を移せしは文明六年にて、明る七年彼地にて寂すと云。是を以て推す時は當所に寓居せしは、文明二年より同六年迄なり。見聞集に云。心敬東に下り侍りし時海面近き宿りにて

朝霜はひさき風ふく海邊かな

東にあまた年を送りし頃

月にこひ月に忘るゝ都かな

東に侍りし次の年初冬の頃

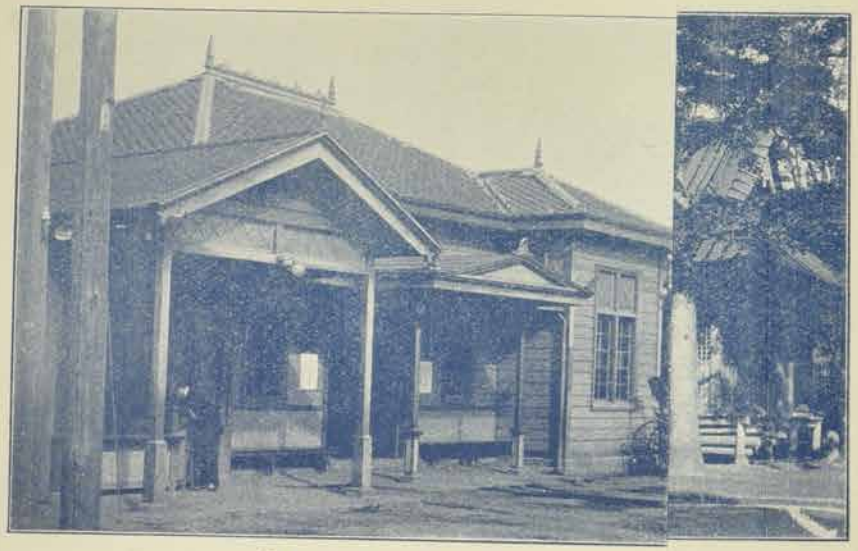
めくるまをおもへば去年の時雨かな

品川九品寺（按ずるに今此邊に九品寺といふ寺院を聞かず、廢寺となりしにや）

九ッの品かはりたる蓮かな

と發句ありしに、人聞て川にはちすめづらしきと沙汰しけれ

隆崇寺

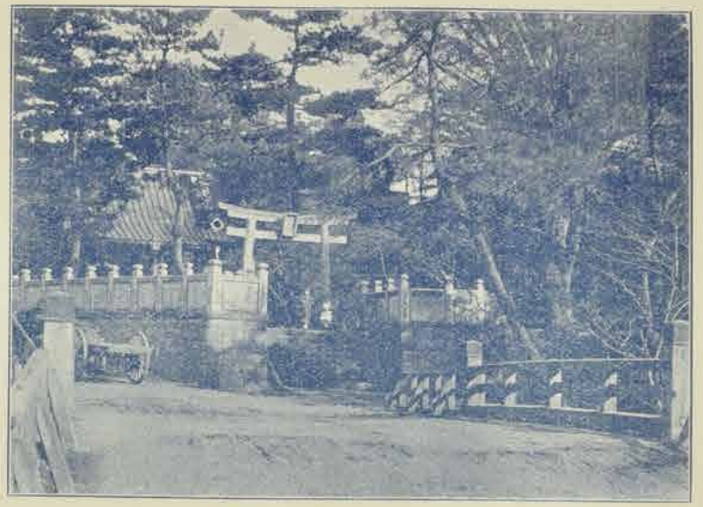


目黑停車場

大崎町役場

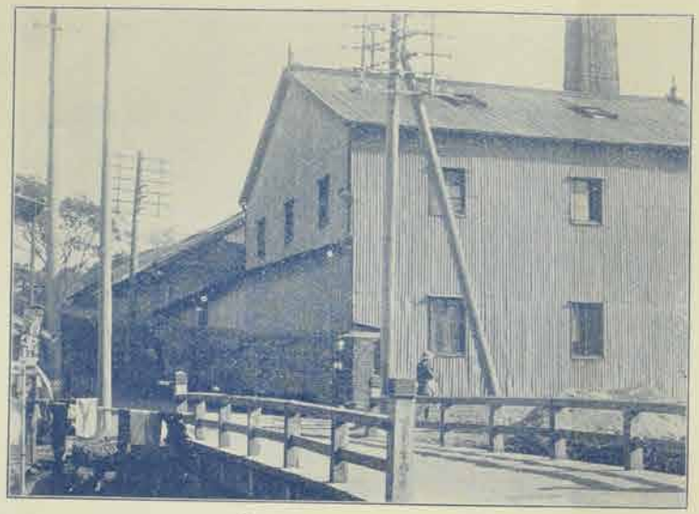
隆崇寺

最上寺願本寺

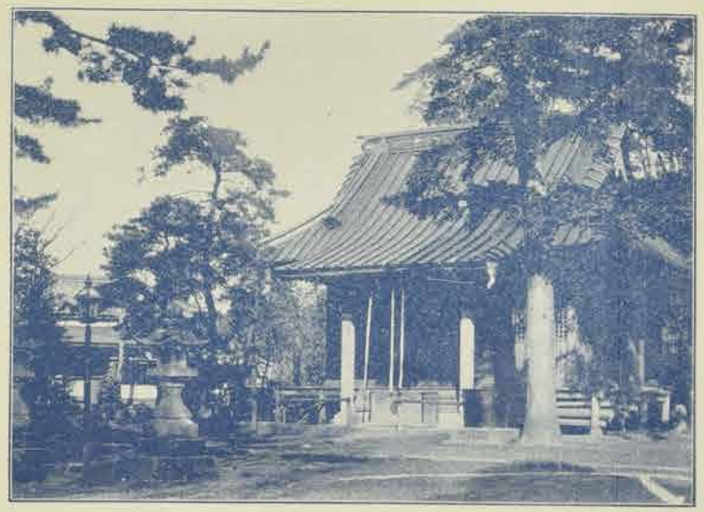


崎ヶ袖橋

目黒停車場

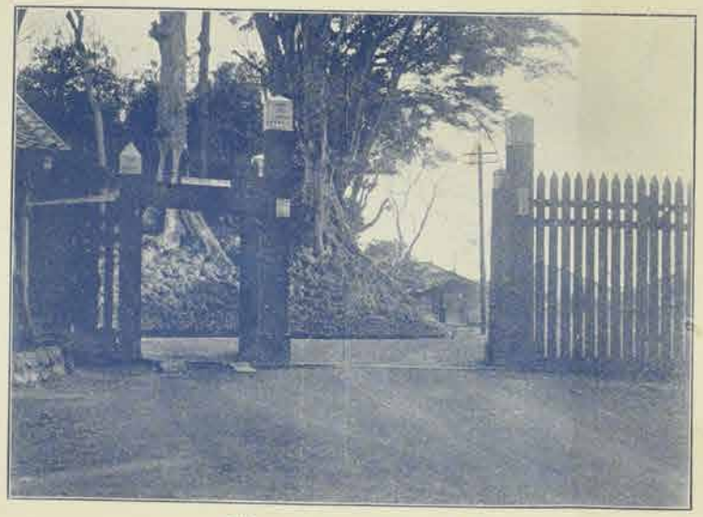


居木橋



雉子神社

大崎町役場



嶋津公邸

戒法寺

ば、

極樂の前にながるゝあみた川
蓮なくてはことの葉もなし

と心敬證歌を引れたり云々。按ずるに此發句紀行附歌に第二の句を「品川しるき」として、其詞書に江戸に赴し時品川に宿りてとあり。又一説に太田道灌當所の館にて千句の連歌興行の時、心敬が詠せし卷頭の句なりと云。未だ孰が是なるを知らず。又心敬毎年當所に下りし由見聞集に見えたり。一とせ太田道眞川越城にて千句の連歌興行の時、心敬も宗祇も同く其連衆たり。文明六年六月十七日道灌江戸城和歌の會にも其席に連る之を江戸歌合といふと。

◎大崎町

大崎町は、品川町の西北に在りて、東は御殿山の下に連り。西は目黒村に界し、南は平塚村に接し、北は東京市芝區白金今里町と白金猿町とに隣れり。

當町は下大崎、上大崎、谷山、桐ヶ谷、居木橋の五村を併合したるものに係る。明治四十一年十二月三十一日現在の人口は八千五百二十四人なれば、今やそれより增加し居るものと信ぜらる。此地は白金臺に續きたる一帶の丘陵なれば、往古八ッ山下より東京灣に通ずる入海に對する曲角なりしに因り大崎の名を得しものにはあらざるか。素より確證とてはなけれども、地勢を視て考るにかくあるべしと思はる。

◎上大崎

上大崎はもと村名にて今は大崎町の大字たり。正保までは單に大崎村とのみ稱せしが元祿に至りて上下に分てり。而して上大崎は山手官鐵線目黒停車場の東南に位す。小名は左の如し。

永峰通り　六軒茶屋町　森崎　鳥久保　中丸　上谷
池谷　三島下　上谷　平岡

●陸軍衛生材料廠

陸軍衛生材料廠は永峰通りの奥に在り。陸軍の衛生に關する諸材料を管理するの廠廳なり。

●誕生八幡神社

誕生八幡神社は六軒茶屋町に在り。瓦葺素木造りにて、赤色の格子戸を附し、延生八幡宮の舊白字額を掲ぐ。盥石には安政四丁巳三月再刻と見ゆ。

●光福院

高福院は五百六十三番地に在り。四國八十八箇所寫弘法大師第四番の札所なり。門內左右墓地にて大師堂は正面に位し、茶瓶並に休憩床を置けり。

●妙圓寺

妙圓寺は、陸軍兵器支廠白金彈藥庫の南低地に在り、日蓮宗にして誠瀧山と號す。本堂の前老槇の下に日蓮遠忌の寶塔を

建つ。崖下小瀑あり。境内に妙見堂を安置す。盥石に貞享丁卯歳夷則中三日奥州志和住北田喜平次と刻す。

●僧上寺下屋敷

増上寺下屋敷は町北白金今里町に接せし所に在り。寛文元年麻布龍前坊谷の代地として賜りしものなり。もとは子院七箇寺ありしが、今は最上寺、本願寺、戒法寺、清岸寺、光取寺の五箇寺のみ現存せり。

最上寺

最上寺は七百六十五番地にあり。極善山と號し、卽相院と稱す。開基は戸川内藏助にて、開山は源蓮社勝譽巡公上人なり(元和六年三月二十三日寂)寺はもと江戸溜池に在りて燒失し更に麻布狸穴に移り、寛文元年又こゝに轉せり。門に極善山の綠字額を掲く。戸川安清の書なり。墓地に戸川家歷代の墓あり。其の中に故播磨守蓮庵戸川安清墓も見ゆ。

畑時能碑は墓地入口に在り。表面に畑六郎左衛門君碑と題す偶面に刻する選文は安積信(艮齋)にて河三亥(米庵)天保九年戊戌十月其の裔秀重の建る所なり。時能は南朝の忠臣にして人の皆知る所なればこゝに贅せず。

●本願寺

本願寺は七百八十七番地に在り。撰擇山と號し念佛院と稱す開山は稱譽光幽上人(寛永十一年四月十日寂)

堂前に圓形に作りたる滿天星二株を植。秋色愛すべし。

戒法寺

戒法寺は七百八十四番地に在り。東照山と號し榮願院と稱す。元和八年江戸本芝に創立し。寛永九年麻布狸穴に移り。延寶二年こゝに移る。開山は傳譽良呑上人(承應元年五月四日寂)

清岸寺

清岸寺は七百九十八番地に在り。法性山と號し淨國院と稱す。寛永七年江戸八町堀に創建し。同十二年芝金杉に轉じ。明暦三年火災に罹りて麻布狸穴に移り。其の後こゝに來りぬ。開山は曉譽法雲上人(寛永十九年正月二十九日寂)。門内に祐天上人手植櫻あり。風姿賞觀すべし。庭上に秋葉の小祠あり。境内甚だ清潔にして點塵なし。

光取寺

光取寺は七百六十九番地に在り。寶運山と號し攝現院と稱す。初め慶安寺といひ。寛永元年江戸西久保に起立す。同十一年麻布に轉じ。天和三年こゝに移り今の寺號に改む。開山は向譽知童上人(寛永十五年十二月二十日寂)

七ヶ寺の中正福寺跡には高輪常光寺建築中。善長寺は見當らず。此外隆崇院、寶藏寺(淨土宗西山派)あり。

◎下大崎

下大崎は上大崎の東に在りて。芝區白金雉町に連れり。相傳ふ。往昔島田若狹の開拓せし所なりと。東北は地勢高く西南は低くして山手線の鐵道貫通せり。小名は左の如し。

袖ヶ崎　阪下　霞ヶ崎　霞ヶ崎下　池下　本木

●島津邸

島津邸は袖ヶ崎に在り。因て袖ヶ崎屋敷といふ。入口左右に銀杏樹を植。舊松平陸奥守抱屋敷なり。

●下大崎阪　袖ヶ崎橋

下大崎阪は雉子宮の南方に降る阪なり。此處左に雉子宮を望み。前面は低地を隔てゝ霞崎の森林に對し。大に郊村の風趣に富めり。廣重の畫にあらむと思はるゝ景なり。阪下に袖ヶ崎橋あり。其の下に三田用水通し居れり。

●雉子神社

ますらをの狩せし昔思出て。今ぞ尋ぬる雉子の宮。
矢並つくろふ影はなく。野邊に轟く汽車の音。

雉子神社は所謂雉子宮にて。上下大崎及び谷山の鎭守なり。祭神は日本武尊なるよし。

石路九級を登れば。石の鳥居あり。雉子宮の石額を掲ぐ。次に石獅石燈相並び。左に稻荷の小祠あり。社殿南西に面し。銅瓦素木造なり雉子宮の白字額を扁す。從四位侍從源源足と署す。拜殿左右に隨臣を置けり。東崖の下に築山空池ありて。小庭園を設く。

社傳に云。文明年中當所に白雉一羽飛來て死す。其夜村民の夢に甲冑を著したる人來て告て云。我は日本武尊なり。我を當所に祀らば國家を守護し村民安全なるべしとて。遂に白雉と化し飛去ぬ。是に於て彼白雉を埋み大鳥明神と號す。大獸院殿御放鷹の時白雉一羽當山に飛入しかば。之を追て社前に至らせ給ひ。村民に神號を問せられしに大鳥明神と言上せしかば。今より雉子宮と稱すべしと上意ありしといふ。

東都一覽武藏考に云。雉子宮別當を白雉山寶塔寺と云。天台宗也。慶長の比御狩の時雉子此社に飛入しに因り。社の名を問はせ給ふに。山の神の社にて名もなしと言上しければ。さらば雉子の入たれば以來は雉子の宮とも申せとの御事にて。此名ありとなん。社地は人家ちかき所なれども。幽境にして春の比はみどりくれなゐ田畝にみちて。閒歩するに宜しき地なり。」

按ずるに武藏考の說其の當を得たるもの、如し。白雉の說は彼の白鳥陵の故事より作り設けたるものか。白雉は往古年號に名けし如く容易に居るべきものにあらず。是は通常の雉子なるべし。武藏考に慶長の比とあれど是は寛永の頃とする方よろしきか。家光公の品川邊に啓行ありし事屢々なればなり。

●寶塔寺

寶塔寺は雉子宮の隣地に在り。天台宗にて舊別當職なり。傳に文龜二年南品川獵師町邊に創立すとあれども。同所は明暦年間の開拓なれば。信ずべからず。初め法東寺と書せしが。寛永の頃今の文字に改む。萬治年間舊一柳近江守抱屋敷の處に移りしが。目黑川屢々漲溢せしに因り。今の地に轉じたりと

いふ。創立以來麹町城琳寺の門徒なりしに。正德年間中興開山傳陽の時に當り。東叡山より寺格を進め城琳寺末と爲し、且つ白雉山と號せしむ。

元三大師堂あり。大師自筆の畫像を安置す。此像は當寺南品川に在りし頃。不知の僧來りて住持に授與せりといふ。

●本立寺

本立寺は白金猿町袖崎神社より西南の奥に在り。妙建山と號す。日蓮宗にして池上本門寺の末なり。慶長二年池上第十二世佛乘院日惺上人之を目黑村に創建す。後ち衰微して住僧もなく當地惠性寺より兼帶せり。然るに貞享四年新地の寺院を廢せらるゝに際し。惠性寺は正保四年の創立なれば廢せられたり。此時住持日演上請して本立寺の山寺號を廢蹟に移し。同寺二世以下住僧の名を除き。惠性寺開山性澄院日通を第二世として相續す。開山日惺上人は備前國福岡の人にて。關白二條昭實卿の猶子たり。天正九年相模國鎌倉妙本寺及び池上本門寺兩山の住職となり。府内に五ヶ寺房總兩國に數ヶ寺を創立す。慶長三年七月六日寂す。開基は能勢市十郎賴永の妻(寛永十八年九月二十日歿)にて。法名法性院天窓日忠といふ。實は惠性寺の開基なり。同寺は其の歿後七年に其の菩提の爲め創立せるなり。

●池田邸

池田邸は霞ヶ崎に在り。此地は丘陵にて袖ヶ崎と相對し。森林蒼茂し。丘端老松散立し。遙かに之を望めば霞靄抹刷し景色甚だ佳なり。

◎谷山

谷山はもと小村なるが。今や大崎町に屬し。其の大字たり。地は大崎の南に在りて目黑川を帶ぶ。此地の俗目黑川をば垢離取川と唱ふ。川下目黑の邊にて淸滌する者あるに因る。別に記すべきものなし。

◎居木橋

居木橋は南品川町の西に在り。もと村名なりしが。今は大崎町に合併し。其の大字たり。域内目黑川に居木橋あるを以て名くといふ。又ユルギ松といへる古松ありし故にユルギ村とも唱ふとの說あり。ユルギとは震動の義なり。按るに此邊往古は入海にて大崎の名あるに就て考れば。風浪の爲めに崖根などの震動せる事ありしより此名を得たるならむか。

●居木橋

居木橋は北品川宿に達する途上に在りて目黑川に架せし板橋なり。地名の起りし所なりといへば。ふるきものなるべし。

●居木神社

居木神社は南西の丘上に在り。もとは五社明神社と稱せり。丘下に石の鳥居を建つ。寛政四壬子年九月吉日と刻す。石磴十六級を登れば丘上正面に社殿あり。瓦葺き素木造り。居木神社の黑字額を表し。傍に雉子宮と扁す。社南に小支祠あり。

境内松杉の老樹鬱蒼たり。當社鎭座の年代詳かならず。凡そ二百餘年前までは西北の方に在りしが。溢水の患を避けて此地に遷りしよし。舊蹟には大樹の松あり。是れユルギの松と稱するものなりといへり。貴船、春日、子權現、稻荷の四座を配祀しありしに因り。もと五社明神社と稱せしといふ。祭典は毎年九月二十三日なり。

●觀音寺

觀音寺は居木神社の隣地に在り。天台宗にして東雉山松琳院と號せしが。後ちに金剛山圓通院と改む。舊五社明神社の別當なり。開山は大阿闍梨法印光海(天正元年九月二日寂)中興開山は第十三世法印智淵(享保頃の人)此時舊江戸麹町山王(今の日枝神社)別當城琳寺の末となれり。當寺も昔は居木橋の少し南に在りしが。神社と共にこゝに移りしといふ。舊蹟には石地藏ありとぞ。

五級の石路五層の上に門あり。本堂と共に草葺なり。門外に征露役の戰死者加藤榮吉の碑を建つ。

◎桐ヶ谷

桐ヶ谷はもと村名なりしが。今は大崎町に屬し。其の大字たり。南方は高地なるも。北方は低地にて谷多し。小名に幡ヶ谷。花ヶ谷、上の池、座頭窪などあり。東方に相州街道係れり。

●氷川神社

氷川神社は西方の丘上に在り。入口に石の鳥居を建つ。天保十三年壬寅九月氏子中と刻す。傍に警視廳の制札あり。進めば斷崖より二條の懸泉灑ぐ。瀑壺は石を以て疊み。草亭の設けもあれば。夏日は來り浴するを得べし。石路十階を登れば。一對の石獅を置き、赤色の鳥居を建つ。神木の老松空に聳ゆ。大さ三圍。更に北に登ること三十階。神樂堂あり。正面は社殿にて茅葺素木造りなり。氷川神社の金字額を掲ぐ。明治十三年十二月參議伊藤博文書とあり。小祠二宇を認む。社後は杉林枝を交ゆ。東に廻りて下れば。戰死者松澤梅吉の碑あり。岡見正哲の撰文にて明治三十九年九月建る所に係る。當社鎭座の年代詳かならず。祭典は毎年正月十五日にて。備射講といふことを執行し。神樂を奏するよし。

●安樂寺

安樂寺は氷川神社の下目黑道の西側に在りて水田に面せり。松園山と號し寶林院と稱す。天台宗にしてもと山王別當城琳寺の末なり。開山は竪者法印良珊(天正元年正月寂)本尊には三尊彌陀を安す。門屋本堂共に茅葺にて境内に池あり。

●茶毘所

茶毘所は安樂寺の西方舊靈源寺境内の奥に在り。煉瓦造りにて桐ヶ谷火葬場と稱す。地藏堂には「此不遠」の扁額を掲ぐ。

四邊蕭條てゝに來り此額を讀めば。心凄然としてに冥土至れるかの感あり。
入口は相州街道に臨み。六字名號の石標を建つ。享保二丁酉八月十五日芝松本町願主生譽本願比丘と刻しあり。

◎大井町

大井町はもとの品川領大井村にて。東は東京灣に臨み。西は馬込村と平塚村に隣り。北は品川町に連り。南は入新井村に接せり。
中古此邊は大井鄉と唱へしと見えて。貞治五年（六百二年前）室町家の文書に。荏原郡大井鄉不入讀村とあり。又鹿島神社寛正四年（四百十三年前）の鰐口にも荏原郡大井鄉と彫りたり。
町内光福寺は建仁（七百餘年前）以前の古刹なりといへば。當地開拓の古きを知るべし。承久記等の書に大井次郎品川太郎の名見ゆ。卽ち當地の住人にて地名を苗氏と爲せしものならむ。
町名大井と稱するは。光福寺境内の古井は寛仁元年に穿ちしものにて。土人之を大井と呼びしより起れりといひ傳ふ。
明治四十一年十二月三十一日現在の人口は一萬六千〇十人なれば。今は其の數を增加し居るものと知らる。
小名は左の如し。

鮫洲　海岸なり
山内　鮫洲の西裏にて山の下なり。
立會　立會川の附近をいふ。
權現臺　北方の高地
鐙ヶ淵　立會川より西南の通りなり。

以上新地圖に記するもの

御林町　海晏寺舊表門に續ける町家なり。往昔官林ありしを以て名く。
濱川町　御林町の續きなり。中央を濱川の流るゝを以て名とす。
三十軒家　濱川町の内にて南方にあり。もと三十戸ありしより名く。
喰違跡　三十軒家の内にある唱なり。往古喰違の土手ありしに因り名く。
上芝下芝　西寄を上芝。東寄を下芝といふ。白山神社の南方なり。古へ此邊の浦を竹芝と呼びし名殘なりといふ。
品川原　北方にて南品川宿の境田圃の間をいふ。古は品川の民此地に居りし故名とす。幕府時代は放鷹地にて。此邊の雲雀の聲は他境に勝れたるよしにて。大井雲雀と稱し。諸人の賞する所となり居れり。
本村　中央の地をいふ。開拓當時は人多く住みたれば名く。或は中居ともいへり。

出石　西南の方にて馬込村の境をいふ。
狐窪　西方上蛇窪の境　大塚　同所
金子原　同所の少し南方。昔金子某といふ富豪の居りし地なり。
以上舊來の稱。

敷島の道の光りとますらをの。昔しながめし月はしも。山の端さして猶出でにけり。

◎權現臺　城蹟と貝

權現臺は。淺間臺の西に在る高地の稱にして。一に權現山といふ。東海道本線其の東を經過す。
此處は城蹟にして北條の臣間宮越前守城代として此に據り。里見氏と合戰ありしよし。武藏舊蹟考に見ゆ。
同書又左の記事あり。

海原や山の端さして出る月の
入るかたもまたむさし野の原

此詠は間宮左衞門信高（前記の越前守か）の詠と云。此間宮は天正中北條家の臣間宮豐前守好高の一族にして。文武の道にくらからず。鷹術に達す。其頃の秀歌にして。正親町帝勅點ありしと云。
此處は太古貝塚の遺蹟なるよしにて。往年種々なる土器石器を發掘し。大に考古學者を資益せり。試みに杖を植て幾千年前の古貝を探るも一興なるべし。

○品川氏屋鋪蹟

品川氏屋鋪蹟は權現臺の陸田中にあり。土俗之を品川殿館跡と呼べり。風土記稿に云。相傳ふ高家品川内記氏繁が祖先の居跡なりと。家祖氏眞の事を參河記に載て云。氏眞依二岡部反逆一還二小田原一品川構レ居所一入置二氏眞内室氏政妹なれば大怒惡口して從二品川一乘船出二遠州一被レ憑二家康一云々。寛永譜に今川上總介氏眞次男新六郎高久。慶長四年台德院殿に謁し奉る。今川氏は正統一人の外稱號を憚べきにより。鈞命に因て氏を品川と稱し。寛永十六年死す。想ふに此屋敷跡氏眞が舊蹟にて。高久家號の由て起る所あらん。『武藏舊蹟考には品川殿館跡元品川と唱ふる邊をいふ。今川義元の後裔駿州より此所に移り住居せられしとなり。又谷山の上なりともいふ』とあり。傳ふ所一樣ならず。今は風土記稿に據る。

●恩賜館

恩賜館は。大井町權現臺の南に在り。表口は東に面し。門は石柱鐵骨扉なるも。館の結構は宮殿風にて全く通常のものと異なり。是ぞ故の大勳位公爵伊藤博文公の居館にして。嘗て公が議長となりて。井上毅以下の碩學官僚を集めて憲法を制定したる宮中の會議館なりしを。明治四十一年憲法發布二十年の記念として。特に公に賜りしを此に移し建たるものなり

恩賜館の名は直ちに其の實を表したるものと知らる。椅子卓子等は宮中に在りし時の物なるよし。公の薨後嗣子博邦氏等こゝに住せり。

故公の靈殿は館庭の裏にあり。内に素木造りの小祠を安置す總て質素を主とし裝飾を須ゐず。

秋風寒きはるひむに。たをれし公こそ國の爲め。
盡しゝいさほ高ければ。低き吾等の仰ぐ なれ。
其の名は朽ちず千代八千代。春又春の末までも。

●伊藤公の墓

伊藤公の墓は。恩賜館を西北に距る六七町谷垂と唱ふる地に在り。墓域は一廓を成し。南に門あり。入口に事務所を設け。參拜者の名刺を受く。東に進めば公の墓は數段高き處に在りて石を以て圓く築きあげ。石の玉垣を環らし。銅燈籠兩基を排置して固圍に鐵柵を設け。前面敷石の左右に五對の石籠燈を置き。別に大なる石燈籠を建つ。立憲政友會の寄進にして明光上下(左)勤施四方(右)と大書深刻し。外界は竹垣を結び。前に石製の大鳥居を建つ。明治四十三年十月貴族院有志者建之と銘せり。傍に石盥あり。福岡縣貝島大助氏の納る所なり。石は悉く華崗石なれば白色にて光あり。其の外は植込の庭園にて纖塵を留めず。最も清淨なり。嗚呼公は維新の元勳國家の柱石たりしが。明治四十二年十月二十六日滿洲哈爾賓の驛に於て。韓人安重根の狙擊する所となり。身に三彈を受け。遂に車内に薨去せられたり。遺骸は軍艦秋津洲に載せられて十一月一日朝横須賀に著し。靈柩は新橋驛より赤阪靈南坂の官邸に入り。同四日日比谷公園に莊嚴なる國葬式を執行され。各國元首の贈りし花環を以て飾りし靈柩はこゝに葬られたり此事恍として昨日の如くなりしが。既に盛なる一周年祭は行はれ。月餘を歴たり。

公は人臣の極位に在りて 皇室の御優遇を蒙りたれば。國家の爲めに斃れたるは素より其の志なり。在天の英靈必らずや莞爾たらむ。

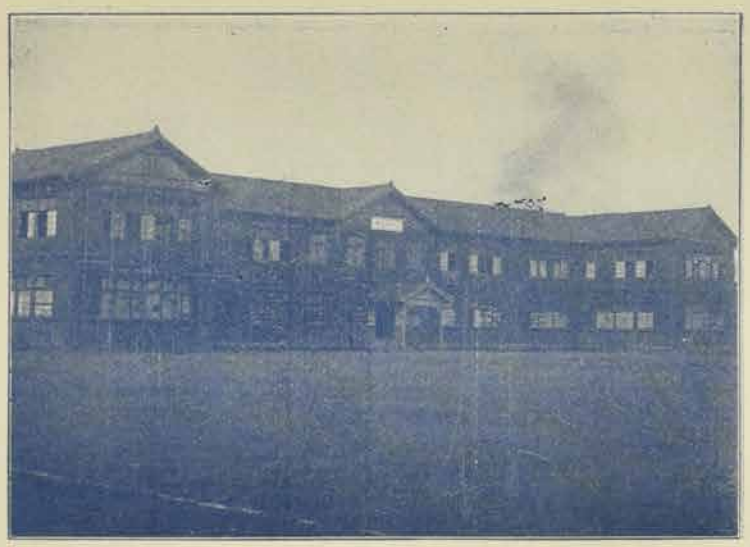
●料理店川崎屋

料理店川崎屋は。鮫洲の海岸海晏寺の舊門前より少しく先に在り。「あなご料理」を以て其の名高し。百五十年來の老舗にて今に至り繁昌す。

編者嘗て同僚とこゝに飲みしが。客室は東京灣に枕みて眺望佳絶。殊に浴場の設けあり。浴後欄に倚れば。房總の諸山遙に我を迎へ詩興を惹く。曩に 皇后陛下の御小憩所と爲り。伊藤公井上公等も屢々來りて杯を擧げたりといふ。

●八幡神社

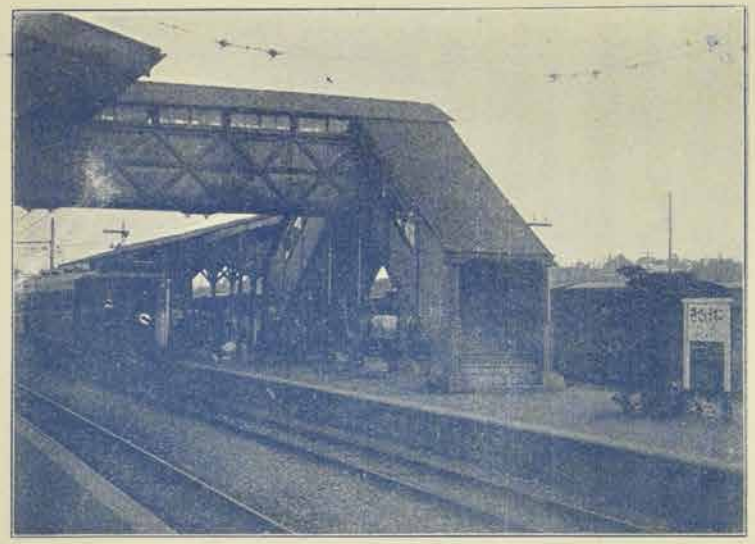
八幡神社は。御林町に在り。外郭石の玉垣に魚小賣組合とあり。石の鳥居は寛政元年乙酉九月建る所。次に石獅對立す。



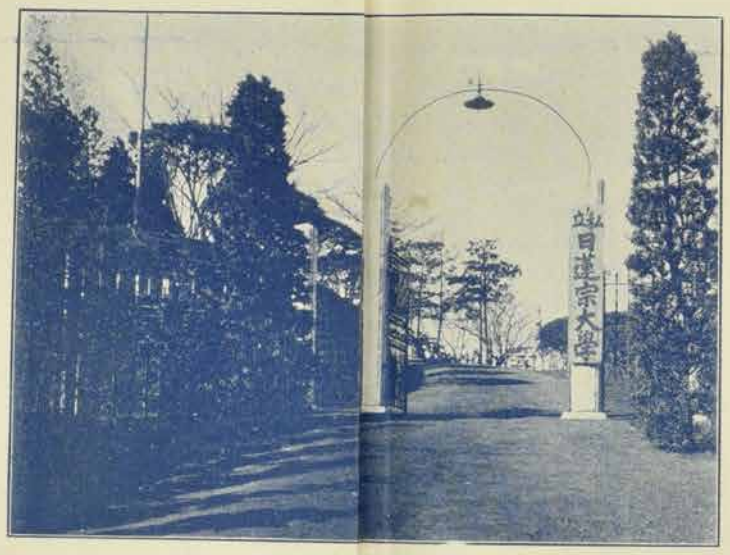
日本體育會荏原中學校

來福寺地藏堂

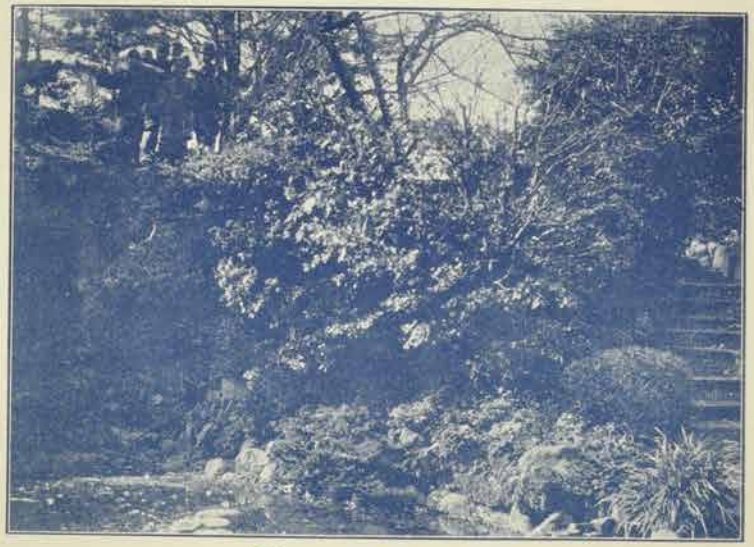
來福寺



大崎停車場



日蓮宗大學



妙華園

池田公園庭園

伊藤侯の墓

氷川神社

共に多く紅巾を掛く。次に石燈籠あり。安政三丙辰年四月吉日と刻す。次に又石獅を置く。町内獵師中と彫す。正面の社殿は瓦葺素木造りにて高欄を附し。八幡宮の黒字額を掛く。社前に鐵製貯水盤を並置す。嘉永三庚戌年五月とあり。社南に丈餘の石垣を築き。上に石燈籠一基を建つ。明治三十八年五月と刻しあれば。征露戰役の記念なるべし。南畔に池あり。藤棚を架し。鯉魚の簇るを見る。中島には小祠二あり。一は辨天社一は淺間神社なるべし。傍に三十三度登山大願成就御林元芝總同行など刻したる碑を建つ。北畔には稻荷の小社あり。境内には榎の老樹五六株點在せり。當社創立の年代は詳かならざれども。大井町に於ける古社なりといへり。祭典は八月十五日にて神輿を渡す。又五月中神樂湯立等の神事を行ふを例とす。

◎立會川

立會川（たちあいがは）は碑文谷桐ヶ谷邊の谷より出る涓水集りて小流を作し。中延、上下蛇窪等の村に至るも猶細流にして其の名なく。大井町に至りて始て立會川の名あり。大井町の中央を流れて東方海に注く。海濱に至れば濱川とも稱せり。

風土記稿には其の名に就て辨じて云ふ。昔上杉北條戰爭の頃。此地にて合戰ありし故立會の名起れりと。按るに大永年中品川の前高縄の原にて。上杉朝興の兵と北條氏綱の勢掛合せしこと。小田原記等の書に見えたり。土人の傳ふる所は此事をさしていへるか。或は鎌倉右大將家の頃。朝比奈義秀等劍術を學びし處なれば。太刀合といひしを後に今の文字に書替しと。是は尤うけがたき說なり。又云昔此處に市立て野菜を賣買せしに。人々つとひて互に立會せし地なれば。立會の名は起りしと。かく種々の浮說のみにて皆證跡もなければ。うけがたき事なり。此川の水源は碑文谷小山中延等所々の惡水落合て一流となり。中延村の内小名瀧合といふ地を歷て蛇窪村に至りそれより當村に入るといへり。是によれば其始は瀧合川と唱へしを。後に誤り唱へてタチアヒ川と稱せしにあらずや。今土人にとへばタッチ川など答ふるもあり。もし然らば今中延村にて川の名なきは。其唱を失せしならん。されど此考もさせる證あるあらざれは。牽强に涉ること知べからず。』

朝比奈云々の說は。同書にいへる如くうけがたき說なるはいふまでもなき事なれども。昔よりかゝる說もありと見えて。武藏舊蹟考に左の如く記せり。

朝比奈屋舗　品川松平土州侯別莊の地朝比奈三郎義秀のやしき跡なりといふ。

朝比奈か井　同やしきにありとぞ。廣き貳間斗深きこと二十丈餘ありて水一滴もなしとなり。

太刀合橋

砂水（すみ）の小川にかゝる。義秀劍法を習練せし地なりといふ

右にいへる松平土佐守のやしきは。四方の道草載る所の圖に據れば。來福寺と西光寺の間立會川の北岸に在り。入口は海道に當りて。左右松並木なり。朝比奈のこゝに住せしといふこと何れの書にありや。今參考の爲めに之を附記す。

●西光寺

西光寺（さいくわうじ）は東海道線の西に在り。松榮山と號す。眞宗本願寺派なり。往昔は天台宗にて弘安九年（六百三十二年前）榮順法師の開基なりしが。後ち今の宗に改めたり。中興は榮空沙門にて。慶長年間の事に係る。其の系圖は當寺に傳りたるよし。此に據れば榮空俗稱を芳賀出雲守定仲といひ。織田信長の麾下なり。信長薨後比叡山延暦寺に隱れ。法德坊を師として剃髮し。三年を經て武藏に來り。當寺の住職となりぬ。定仲の父は下野國司芳賀豐澄の後裔右近介定明と稱し。後に入道して玄覺と號す。武田信玄の甥にて屢々戰功あり。信玄の感狀は傳へて寺寶とす。其の文左の如し。

今度在城合戰之時自午蒙痛手一日之內敵首十三內甲首七討捕勝利之段至感悅侯幷忠節無比類侯至子孫可申傳恐々謹言

九月十九日　　信濃守　晴信花押

芳賀入道玄覺殿

其の他寺寶には聖德太子木像一軀（杉の丸木にて長八寸許）六地藏木像各軀（立像長三寸餘小野篁の作といひ傳ふ）藥師木像一軀（長二寸許弘法大師の作以上は天台宗の時客殿に安置せしものなりといふ）六字名號二幅（一は顯如上人一は蓮如上人の筆）あるよし。

當時にはもと兒櫻、醍醐櫻等の名木ありしが。今は已に老朽して僅かに其の殘株を存せり。俳句の碑あり。

暮きつてちにつく花のにほひ哉　　日阿

若木の櫻を多く植あれば。數年の後は再び盛觀なるに至らむ。當時名花のありし時の實況は。四方の道草載する所を以て之を證すべし。

西光寺（來福寺より七八丁許）門を入てかたはらに白のひとへのさくらあり。幹は合せいたくばかりにて。梢よもにさし覆ひたるながめいとめでたし。有明櫻と名づくと聞ば。

今日こゝの花にやとりて起ていなは
なこそ有明の月もみてまし

又一もとあるを車かへしと名づく。是もそのかみ奈良のある寺にいつくしき花ありしを大內よりめされて。すでに根こしてくるまにのせていにしを。寺僧いたく惜むのあまり。ものゝぐして追かけ。其花を奪かへしたり。されば重く罪せられなんとありしを。さはかり命にかへて花を惜て奉らさしがやさしとて。寺の僧どものつみゆるさせ給ふ事のありしとか。よて其花を車かへしとは名づけしと云。この一木もその種うへしなるべし。

再考車かへしの櫻は。攝州住吉慈恩寺の境內に在り。後醍醐帝再び御車を廻させ給ひて叡覽ありしよりかく名に負しと云。さるを爰に奈良の或寺にいつくしき花ありしを云々なと書たるは。伊賀の花垣の庄の故事をおのれ暗記の思ひあやまれる也。花垣の庄の事は上東門院南都の東圓堂の前にある八重櫻はたくひなき名花なりとて。興福寺の別當に仰せて禁庭に移しうへらるべしと其木を掘車にのせ。既に牽出とせしを。僧徒等いたく惜みていかに勅なればとて外にうつしやるべき。罪をうるとも是をとゞめんと。さへぎりとゞめしを女院聞し召れ。是思しあやまらせ給ふなり。衆徒のいふ所風流いとやさしと感せさせ給ひ。伊賀國餘野の庄を寄られ。春毎に花のあたりに垣をめぐらし圍みて。七日の間人をして是を守らせらる。それより餘野の庄をあらためて花垣の庄とぞいひけるよし。重ねてこゝの文かき改へきなり。

又うす色なる一木あり兒櫻と云。

佐保姫やなでゝ生せしちござくら
山ふところの露を乳ぶさに

こはいかいめきたる樣なり。堂のかたはら少し高き所にいくもとゝもなく叢生のさくらあり。花は八重一重相交はる。女文字してたいこ櫻と札にかきてたてたり。正字はいかにぞと問に寺僧のしらずと答ふ。思ふにこは醍醐なるべし。

いつの世にみやこの花をたがうへて
盡さぬ春のさかりみすらん

この花八重一重相交はれるは。初苗うへしときふたくさを束ね植たるがのちは根ひとつに成。枝もかたみにさしかはして。二いろにさくなるべしと寺僧いへり。この外にも猶いくもともあるが中に古への名木の枯たる也とて。株ばかりのこれるもあり。そのかみはいかにやありしなど。見ぬ世の春もおもひやられて哀れふかし。はた花見にとくる人もこゝはさまで多からず。堂の緣にこしかけてあかずながめ侍り。

しづけさはすまでもしるゝすまはさぞ
花にこもれる春の山でら

○荏原神社の舊蹟

南品川宿の舊貴布禰社今の荏原神社は。往古西光寺の門內左方の奧の地にありしといひ傳ふ。

●光福寺

光福寺（くわうふくじ）は西光寺より南方一町許の處に在り。大井山と號す。眞宗にして東本願寺の末なり。

當寺も往昔は天台宗にして。當地開拓以來の古刹なり。大井の地名も此より起れりといふ。本堂に聖德太子の作と稱する阿彌陀如來を安置す。

文永二年（六百三十六年）了海上人再興ありしに因り。之を

中興と爲せり。

寺傳に云。了海の父は鳥羽院の皇胤信光の嫡男にて。頭中將光政といへり。和泉の刺史に任ず。母は滋野井宰相の女なり。光政故ありて東國に配流せられて民間に下れり。されど常に一子のなきを嘆きける故。或時齋して藏王權現へ祈誓せしが。或夜の夢に天より星下りて母の胎に入れり。夢覺し後了海を姙みたれば。是れ藏王の奇特なりとて。宮社を造りて之を鎭座す。今品川原にある權現の祠是なり。

又其頃當寺の住持覺圓律師の夢に。聖德太子枕上に現して曰く。光政の子は卽ち藏王の化身なり。汝宜く新に井を穿ち產湯の水にすゝむべしと。因て境內松樹の下に井を堀るに人力を借ずして淸泉涌出して井となる。時に建仁元年六月十五日男子誕生あり。彼水を汲て產湯と爲し。童名を松丸と名く。此井靈井なるに因て大井山と號し。村をも大井村と名く。松丸八歲の時覺圓に從て剃染し。了海と號す。

又叡山に登りて淨榮僧都を師とせしが。其後故ありて親鸞の弟子となり。再び故鄕に歸りて寺を中興せしが。此頃父光政も剃染して空範と改めしに因り。是を當寺に止め置き。己は更に麻布の善福寺を草創して其地へ移り。德治元年（六百五年前）十一月六日示寂せりと。

もと太子堂ありしが今はなし。本堂に聖德太子堂再建事務所の札見ゆれば。目下資金の募集中なるべし。太子の像は五尺許にて傳敎大師の作なりといふ。

風土記稿に大井跡と題して云。客殿の北の方山腹に在り。橫に深き穴なり。或書に云。この井は大なる穴にて臨むもの目くるめくとあり。今はうづもれて穴の徑六七尺もあるべし。土人の傳にこの穴より涌出る水は大旱といへどもつくることなしと」。編者至りし際は境內には車井戸のみありて此橫穴の井は見當らざりし。重ねて尋ぬべし。

門內に銀杏の大樹あり。老樹名鑑に幹廻り一丈八尺五寸。高八丈。四百三十年としるせり。又堂後に喬松あり。遙かに之を望む。風姿愛すべし。同鑑に幹廻り一丈四尺。高八丈餘。三百餘年と記せり。

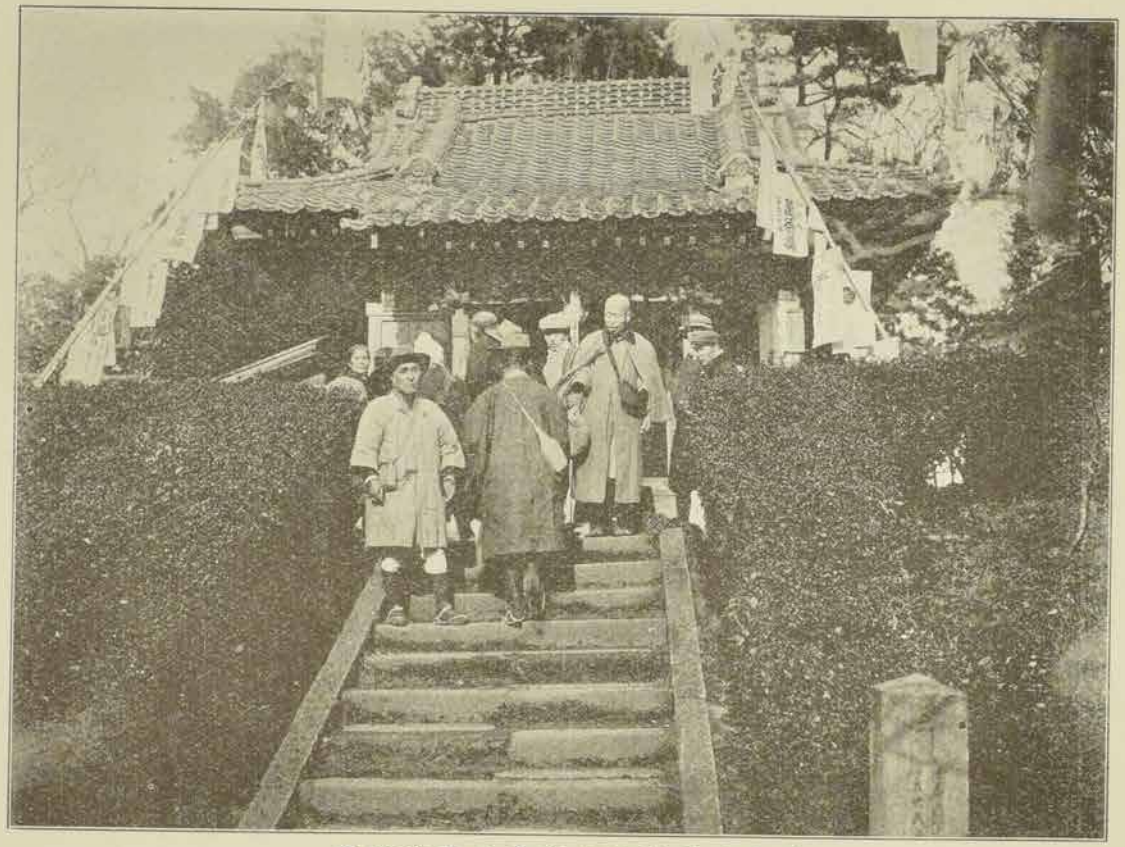
銀杏の傍に光妙寺三郎の墓あり。背面に明治二十六年九月十七日歿二十九年七月建之と刻す。

門前には若木の櫻數株を植たり。

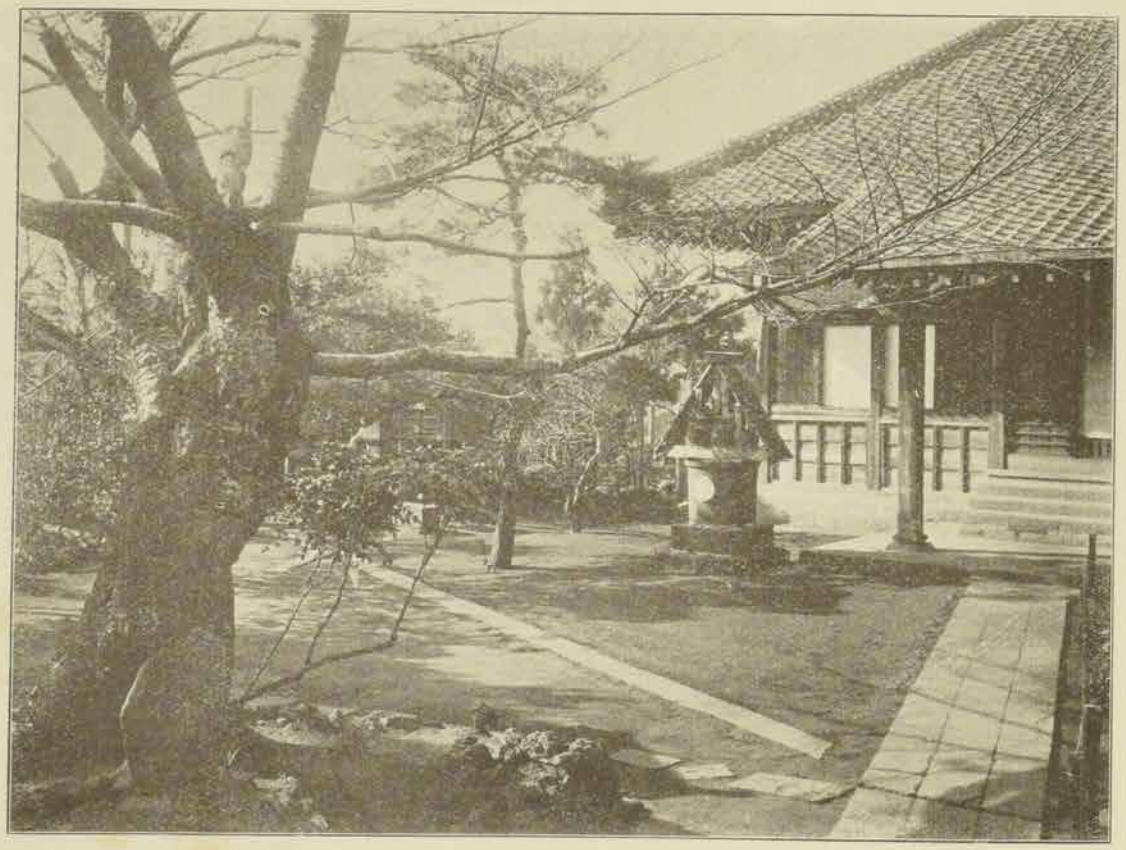
●來福寺

來福寺は立會川の東鮫洲に在り。海賞山と號し地藏院と稱す。眞言宗新義派にして馬込村長遠寺の末なり。本尊は弘法大師の作。延命經讀地藏といふ。世に其の名高し。

正曆元年（九百二十一年前）智辨阿闍梨の草創なりといふ。此處地勢高く。石階二十九級を登りたる上に表門あり。素木瓦葺にて彫刻を施す。前に府內八十八箇所第二十六番弘法大



來福寺內弘法大師堂參詣の群集



清岸寺祐天上人・手植の櫻

師の新石標を建つ。門内北方に小丘あり。上に堂宇ありて歡喜天と扁し。一百十七叟權大僧都法印祐尊書と署したり。蓋し聖天と弘法大師堂を兼帶せるものと見え。傍に納札所あり。本堂は正面に彝えて東向し。棟上に一大白龍を附す。金眼爛として日に輝く。向拜の楣間にも大龍の浮彫あり。堂前の大庭には幾條となく茶樹を列植し。其の間に櫻樹を植。大抵若木なり。二三の朽株も見ゆ。彼の梶原松、延命櫻など其の名のみを存せり。俳句の碑二基を建つ。

世の中は三日見ぬ間にさくら哉　雪中菴蓼太

老木とて更に櫻のさかりかな　秋口

區土記稿に梶原松、延命櫻此二木は共に客殿の前にあり。梶河景季地藏信仰の餘自ら植しと云傳ふ。今もこの例にならひて地藏尊信心の人は櫻の木を納るこゝなりたれば。當寺の境内には昔より櫻樹多かりしが。猶近き頃檀越の寄進にて再び增植せしにより。毎春花の頃は人殊につとひ來りて賑へり」とあり。尙ほ四方の道草に記する所を見るに。春日局手植のものも多くありしよし。其の記左の如し。

東海寺のうちこゝかしこ見ありき。南門より出で畑のほそみちを行。右に田面見わたさる左に海晏寺の山のうしろ見ゆ 菜の花さかりなる滿地に金をしくが如し。向ひに木たちしげりたる一かまへみゆ。松平陸奥守殿の品川のやしきといふは是也と云めり。その垣にそふて西にめぐり。又南に行ば 左はみな畑なり このあたりの道の 來福寺のうしろに出まはら垣のすき間より寺の後面の花みゆ。よこ折て徑に入ば小門あり。そこより入りてみれば堂の前うしろ庭の築山までなへてみな花なり。書院の庭の左の隅にかきをへだてゝ幹くちたる老木のさくら一もとあり。是は春日の局のうえしほかまの櫻也といふ。

植し人の心をそくひしほかまの　花さく春のかげにとひきて

鹽かまのうらなつかしく尋きて　昔をしのぶ花の木のもと

此木もとは梢よりにひろこりて庭のなかはをおほふばかりなりしに。いつのころにや幹折くちて今は三分一かをあますといへり。げに花の品うちあかりてしろくいさぎよき事言葉にのべかたし。此外に淺草さくら一もとうす花さくら二もとみもとばかりみゆ。餘はみな鹽かまの若きを植たるにや。なへて花のけはひ一やうにみゆ。昔はこの庭のさくら數十種あり。大桃灯小てうちん手まり楊貴妃普賢象なんと みな春日の局の手澤のものなりと云。さくらの總の數は百本にたらぬばかりやありなん。又堂の前にゑならぬ松一木あり。梶原松と云。もとこの寺は梶原景時開基にて。その初うへたる松のありしが。枯れたるあとに今の松はしるしはかりにうへしと云。』

境内南に弘法大師一千御忌塔と題せし塔ありて。天保五年歳次甲午三月二十一日造立焉海照山現住快雅と刻す。山號を諸

書海賞に作る。こゝには明かに海照とあり。海照とするがよきにや。

梶原塚に就て風土記稿に記して云。梶原塚境内北の方にあり。景季の墳と云。按に此邊梶原景時父子の舊蹟と云もの多し。已に馬込村の條にも記せし如く。永祿の頃小田原北條家人に梶原氏のものありて馬込を領したるにより。後人附會の説を起し。かく景時が舊跡のやうに傳へしならん

武藏古蹟志には當時の實況を記して云。予丁酉季秋（安永六年九月二十六日）詣二院主一。問二院主法印一。答曰。梶原の石塔なし。本尊を信仰せし梶原氏も假名實名戒名共に不レ知。古き過去帳燒失故梶原氏のこと不レ知由也。來福寺北の方畑中に梶原塚と云あり。百姓持の由。敎に任て裏門を出づ。百姓の話に塚の上に石ありしが下に落たりと。往て見るに五尺計の塚にて上に杉四本あり。南の下に石あり碑とも見えずと。」

是れ百三十四年前の事なり今は其の所を知らず。四方の道草にも梶原の事を記す。併せてこゝに載すべし。いづれにしても景時景季にはあらざることゝ知らる。但立會川の朝比奈といひ。此邊に於ける梶原の傳説といひ。穿索せば面白かるべし。四方道草の記は左の如し。

來福寺に來る徑を出て西南をさして人のゆくまに〳〵行く。（右は富左は松平土佐守殿のやしき也）やゝゆきて南へくだる小坂あり。こゝの右の方を千軒臺と云。そのかみ梶原景時のこのあたり二萬石ばかりの地を領してこの所に住しとぞ。人家ありし跡今畠となると。土人のかたるまゝに書つく。

東海寺に景政塚あり海晏寺に梶原塚といふものあり。彼是思ひ合すに。梶原の黨このわたりに住しと云口碑に傳ふる所の如くなるべし。重て考るに北條氏康安房の里見押へに。三崎城に梶原備前守遠山丹波守富永三郎左衞門を置。遠山は江戸を領し。富永は葛西を領し。此城に番手を勤む。梶原も品川邊を領し。共に三崎に近きもとよりなれば。三人に三崎の番手を勤させしにや。されば品川を領せし梶原は鎌倉時代の梶原にあらず。

●來福寺地藏堂

來福寺地藏堂は御林町の裏八幡神社の南に在り。入口に來福寺地地藏堂としるしたる石標を建つ。寶曆四甲戌年十二月三日と刻す。墓地の奥に佛堂あり。地藏堂なるべし。又此處入口外南角にも地藏堂ありて石ありて地藏を安置す。參詣者多しと見えて香火絶えず。

彼の經讀地藏尊は或は前の地藏堂に安置しあるにはあらざるか。俗傳に云。經讀地藏尊は弘法大師の作にして長九寸八分あり。承保の頃（八百十五年許前）相模國の住人鎌倉權太夫景道一子なきを歎き。此地藏尊に祈りて瑞夢を感じ。神仙消積正元丹といふ靈藥をさづかる。之を服して男子を得たり。鎌倉權五郎景政是なり。其の後子孫梶原氏甚だ信仰して傍に別莊を設け住す。梶原屋敷と今にいひならはせり。一族の石塔當寺に在り。又梶原松延命櫻は梶原が植しものにて。今に伺境内にありといふ。正元丹からびに護符を信心の輩には施せり。

右の俗傳は載せて續江戸砂子に在り。而して何に因りて經讀地藏と稱するにや。其の由來を記せず。淺草榮龍寺にも此と同稱のものあり。（經讀の由來次編に記す）

曳尾庵の我衣安永五年の條に石地藏讀經の風説に關する面白き記事あり。云く。品川邊にて石地藏經をよみ候聲聞へるよし風説あり。伊奈半左衞門殿より御吟味有レ之。地藏の雨覆を取はなし改め候處。後の方に蜂の巢有て。讀經の聲と聞へ候は數多の蜂のこえ也。俄に參詣し願かけなどせし人種々の靈驗もあるやうにいひふらしけるが。一時の笑ひ種に成けり。」

單に品川邊とのみありて。其の所を指ざれば明かならざれども。前記路角にある地藏などにはあらざるか。

又按ずるに。風土記稿に地藏堂と題して。境内九百九十六坪小名御林町に在り。昔は濱川町にありしが。寛文五年こゝへ移されしと云。三間四方の堂なり。來福寺持」とあり。正しくこゝの地藏堂なり。かゝれば本尊の地藏尊をふるくより置きしものと見えざれば。別個のものなるべし。再査を要す。

●御林町の漁家

御林町は東京灣に瀕し。漁利の便を占るを以て。漁家其の軒を並ぶ。毎曉漁獲せし鱗族を板臺に入れ家前に置く。魚商例に來りて之を求め去る。是れ編者の目擊する所なり。一所に集合して市を成すにあらず。

此處は幕府時代南品川獵師町等と八浦の一に算せし地なり。

●白山神社

白山神社は御林町の西の丘上伊達邸の塀外にあり。石階三十一級を登れば。石燈籠二對あり。正面は拜殿にて瓦葺き素木造り。白山神社の黑字額を掲ぐ。奥殿は檜板葺にて假屋の内に鎭坐す。鐵水盤には安政七庚申二月と刻す。境内北に稻荷祠あり。石階の下に石の鳥居を建て白山宮と扁す。傍に神木の銀杏あり。

此邊はもと穢多町なりしよし。當社は白山權現と稱し。祭禮は毎年九月十九日なり。

謹　告

編者名勝舊蹟を探討するを好み。實地に就て其の見聞を記載し。且つ之を史籍に徵して其の舊事を登錄するも。日程限りあるのみならず。他に事業ありて力を此に專らにするを得ず。隨て遺脫あるを免れず。讀者發見し給はる。速かに寄稿あらむことを望む。

東京市四谷區四谷大番町三十四　地　山下　重民

小説　高井蘭山墓　名寛字思明稱文左衛門　天保九戊年十二月廿三日歿年七十七　法號泰敬　墓號齋居士　大崎町
書　戸川蓮庵墓　名安清字興蓮什幕府叙從五位下任播磨守　明治元辰年三月四日卒年八十二　法號荷心院殿故播磨守香響蓮庵安清居士　増上寺別院　戒法寺
力士　陣幕久五郎墓　十二代目權獨力士也出雲人　明治三十六癸卯年十一月廿一日歿年七十五　法號高臺院久心道照居士　同　最上寺
名僧　祐天和尚墓　祐天寺開基也陸奥國磐城郡新妻村人　享保三戊戌年七月十五日寂年八十二　同　光取寺
貴族　日野資秀墓　貴族院議員正三位伯爵　明治三十六癸卯年十一月廿五日薨年四十一　目黒村　祐天寺
故實　松岡梅軒墓　名辰方字子辨稱清助　天保十四癸卯年五月朔日歿年七十七　同　同　同寺
同　行義墓　辰方男　嘉永元戊申年七月卅日歿　同　同寺
名僧　德門律師墓　長泉律院開基也名普寂　天明元辛丑年十月十四日寂　同　長泉律院
儒　松崎慊堂墓　名復字明復肥後人仕掛川侯　弘化元甲辰年四月廿一日歿年七十四　同　同院
本草　青木昆陽墓　名敦書字原甫稱文藏仕幕府　明和六己丑年十月十二日歿年七十二　池上村　目黒村字下目黒
畫　狩野探幽墓　名守信稱采女號探幽齋又白蓮子　延寶二甲寅年十月七日歿年七十二　同　本門寺
同　永眞墓　名安信稱右京叙法眼　貞享二乙丑年九月四日歿年七十三　同　同寺
同　時信墓　稱右京安信長子　延寶六戊午年十二月二日歿年三十七　同　同寺
同　主信墓　時信子濟然叙法眼　享保九甲辰年六月七日歿年五十　同　同寺
同　常信墓　尚信子叙中務法印　正德三癸乙年一月廿七日歿年七十七　同　同寺
同　隨川墓　常信二男名岑信　寶永二乙酉年十二月三日歿年四拾七　同　同寺
同　舜川墓　名昭信融川齋信子　文化十三丙子年十二月十四日歿年十七　同　同寺
同　狩圓墓　元祿十六癸未年十二月廿六日歿年五十三　同　同寺
同　永惠墓　名立信號晴雪齋叙法眼　明治二十四辛卯年一月廿九日歿年七十八　同　同寺

同　加藤守行墓　號遠澤仕金澤侯狩野明探幽門人　享保十五庚戌年十月某日歿年八十八　同　同寺
同　桃田柳榮墓　名守光號幽香齋　元祿十一戊寅年正月十三日歿年五十二　同　同寺
同　柳昌墓　名守明柳榮男　寶永元甲申年十二月三日歿年三十九　同　同寺
名士　星亨墓　栃木縣人　明治三十三庚子年六月廿一日卒享年五十一　同　同寺
官吏　松本莊一郎墓　法號大雄院殿元貞日黨大居士　同　同寺
華族　德川茂承墓　織道作葉局長官工學博士　明治三十六癸卯年三月十九日卒享年五十七　同　同寺
俳優　片岡市藏墓　舊和歌山藩士從一位勳四等侯爵　明治三十九丙午年八月廿日薨　同　同寺
儒　木下順庵墓　名貞幹字直夫京都人松永昌三門人仕幕府　元祿十一戊寅年十二月廿三日歿年七十八　池上村
同　同寅亮墓　私謚日恭靖先生　同　同
華族　勝安房墓　名汝鶴字寅亮號竹軒仕加賀侯順庵二子　寶保三癸亥年十二月某日歿　馬込村字子東
故實　松岡明義墓　薨幕府士名安房稱麟太郎號海舟　明治廿一戊子年四月廿一日薨年七十七　目黒村　祐天寺
明治廿三己丑年六月廿二日歿年六十五

（以下次號）

木下順庵先生の墓に就ては、今より二十餘年前親友岸本槐隱と共に辛苦して之を探り。將さに廢除せむとするに會し。其の事を談して幸に保存するを得たり。其の顛末は後編に詳記すべし。

山下重民附記

長三洲先生題辭
穂波德明君、小野藤太君共著　西田五三書

習字法　全

一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

本書は、小學校教則大綱に基きて、編述したるものなり。凡そ生徒の習字を爲すに當りて、能く姿勢を整へ、執筆及運筆の法を正くし、字行をば整正に、運筆をして迅速ならしむることを期し、煩を避けて、平易簡單に、實用を旨としたれば、初學其の門に入るべき捷徑ならむことを信ず。小學教員の教科參考用書並に生徒の教科書として、必携の良書なるべし。乞ふ速かに一本を購求あらしむることを

山本松谷先生畫

新案松谷漫畫　第一編

一部金四十五錢　郵税金四錢

本書は、我が風俗畫報に、多年經驗ある、畫工山本松谷子が、最近の漫畫にして、意匠の斬新なる、自雲曲を離れて、油然風を起し、一枝の彩毫揮ひ來つて、鳥は啼き、花は笑ひ、百態の人物、活躍せり。刷印又鮮明して、其筆意を失はざるは窃かに誇る處なり。世に松谷子の畫才を知らんと欲するものは漫畫を繙きてよ、紳士淑女、明窓淨几の下に、好侶伴たるべく、初學の徒爲めに購ひて、粉本となせ。

發行所　東京市神田區通新石町　東陽堂

日本名所圖會　毎月一回二十日發行

定價表	冊數	定價	郵税	合計
	一冊	金十五錢	金一錢	金十六錢
	五冊	金七十一錢	金五錢	金七十六錢
	十冊	金一圓三十五錢	金十錢	金一圓四十五錢
	二十冊	金二圓五十五錢	金二十錢	金二圓七十五錢

注意　◎本誌は前金御注文の外送本せず◎爲替拂込は神田郵便局へ振込の事◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

明治四十三年十二月十五日印刷
明治四十三年十二月二十日發行

著作權所有

發行兼印刷人　東京市神田區駿河臺袋町十一番地　吾妻健三郎

編輯人　同市下谷區御徒町一丁目五十五番地　田中市之助

發行所　東京市神田區通新石町三番地（電話本局九七〇番）　東陽堂（振替貯金口座東京第壹壹九〇六番）

日本名所圖會賣捌所

京橋區尾張町　東海堂
神田區表神保町　東京堂
日本橋區呉服町　合資會社北隆館
京橋區鈴屋町　良明堂
日本橋區住吉町　至誠堂
參坂區青山北町六丁目　山陽堂
大阪東梅田町　盛文館
京都寺町二條南　合名會社芸艸堂
京都佛光寺通東入　三共社
本郷區元富士町　盛春堂
神田區神保町　上田屋書店
京橋區銀座四丁目　春祥堂
越後國新潟市　北光社
越後國新發田　齋藤治吉
高知市種崎町　澤本駒吉
名古屋市　淺見文昌堂
信濃國上諏訪町　宮坂書店
鹿兒島市仲町　吉田幸兵衛
下總國水海道　新々堂

明治四十三年十二月

鐵道院

寢臺使用料金ハ左ノ通リニ有之候

一等專用寢臺	大館發午前五時四十分	上野發午後九時	青森發午前八時三十分常磐線廻上野急行
一等寢臺車	上野發午後五時二十五分常磐線廻青森急行	青森發午後十二時四十分上野急行	上野發午後十一時四十分青森急行
一等寢臺車	下關發午後十一時四十分京都發午後八時四十五分	大阪發午後十二時四十分下關發午後十一時四十分	下關發午後七時十分新橋發午後十時四十分
一等寢臺車	新橋發午後三時三十分下關發午後二時四十五分	新橋發午後六時三十分神戸發午後六時	新橋發午後六時

寢臺車ノ連結列車及其他類ハ左ノ通リニ有之候

寢臺車連結列車及使用料金

寢臺使用料金ハ左ノ通リニ有之候

一等專用寢臺車	上野急行	大館急行	上野發午後九時
一等寢臺車	上野急行	青森急行	上野發午後十一時
一等寢臺車	上野急行	青森急行	上野發午後十二時
一等寢臺車	京都行	下關行	京都發午後十一時
一等寢臺車	新橋急行	下關急行	新橋發午後七時
一等寢臺車	新橋急行	下關急行	新橋發午前九時
一等專用寢臺車	神戸急行	新橋急行	神戸發午後六時

同　一等專用寢臺　一人一夜ニ付金四十錢
同　一等寢臺　一人一夜ニ付金三圓
同　二等寢臺　一人一夜ニ付金二圓
二等輕便寢臺　但二人床ハ右料金ニテ御使用相成ルモ差支無之候　一人一夜ニ付金二圓五十錢

業務種目

銅版石版彫刻印刷◎木版
活版電氣版亞鉛版寫眞版
其他各種◎意匠考案◎各商
店營業案內編纂

美術繪畫○地圖○商標○名刺○株券
○小切手○印紙○免狀○褒狀類其他
印刷ニ關スルモノ一切○各種製版印
刷裝釘等

地圖繪畫書籍委托販賣

東京神田區通新石町三番地
東京市神田區駿河臺袋町十一番地
東陽堂
（電話本局九七〇）
（振替口座東京一二九六番）
東陽堂印刷所
（電話本局四八七〇）

定本 延命定丹

定價 百粒入十錢 二百十粒入廿錢 五百五十粒箱入五十錢

胸腹の痛を去り心思鬱閉を散じ頭痛眩暈留飲を治し吐瀉痢病を止め舟車魚肉の酔痰咳過酒の苦を忘れしめ殊に毎食後服用すれば食あたり食物停滯胃病の患なく精神快爽ならしめ百事勉勵心を誘起せしむる良藥也

同名又似寄の僞藥數多有商標及いとや號に御注意を乞ふ

本舗 東京市馬喰町三丁目着店 いとや又兵衛

てんかんの最新藥

てんかんと云へる病は其病源の解らぬより昔時は不治の病と稱へて一旦是れに罹れる人は自から癲人となりたる如く思ひ他人も取合ざれば生涯交際も出來ぬ狀態なりしが醫道開け諸種の難病も全治する今日は顯癲の如きも其病理解明せられ隨つて此病に卓効ある良藥も發見するに至れりされば今日は如何なる難症のてんかんなりとも必らず全治することあるは名醫の夙に唱道する所にして蘇神丸とは即ち此新藥なり「俗人と癲癇病との關係を述ふ」

蘇神丸 藥價（百日分 金參圓（送料八錢）三十日分 金一圓三十錢（送料二錢））

本舗 東京市日本橋區蠣殼町四十三番地 藥劑師 高木與八郎

蘆の藁山人著自畫四百餘圖挿入

江戸府內繪本百人一首

全二冊 定價金一圓六十錢 郵稅金十錢

著者ハ生粹ノ江戸ッ兒、生來六十年間戮シク飜タルマヽヲ些ノ飾リ氣ナク寫シ集メシ年中一切ノ行事ナリ是ヲ見レバ幕府時代ノ江戸風俗遺憾ナク知ルヲ得ベシ必ズ備フベキ珍書也

前東京府知事千家男爵題字
小笠原島司阿利孝太郎君序
山方香峰君編

小笠原島志

定價金二圓 郵稅金十五錢

金文字入クロース裝釘 美麗寫眞版數葉石版木版地圖數葉入本紙築版 六百五十餘頁一冊

第一編地理、第二編沿革、第三編行政、第四編風俗、第五編產業、第六編動植物

本書ハ編者ガ小笠原島嘱託ノ下ニ二年有餘ノ時日ヲ費シタル結果今回漸ク脫稿セシモノニシテ本邦版圖內ニ有リナガラ世人ノ耳目ヲ逸セルコノ奇異ナル風俗歷史產物ヲ有セル小笠原大小二十有餘ノ群島ニ就テ纖細モ遺スコトナク有ユル事實ヲ網羅セシ一大編著也

易學ノ泰斗小國金山先生著

全哲理命名心法

全一冊 定價金六十錢 郵稅金六錢

本書ハ姓名ヲ以テ人ノ吉凶ヲ判斷スルノ原理ヲ說明シタルモノニシテ人生ノ生理ヨリ說キ音聲ノ原理ニ及ビ天地ノ原理ニ考ヘテ姓名ヲ判斷スル占筮ノ法ヲ簡明ニ說明シタルモノニシテ家庭命名ニハ必要缺クベカラザルモノナリ

子爵 金子堅太郎君序
子爵 秋元興朝君序
子爵 禾松謙澄君序

故田口米作君著
日曜新聞主幹
神東惇君增訂

色彩新論

色彩解說圖數十葉挿入

全一冊 定價 並 クロース製 郵稅金八錢 金八拾五錢 製金七拾錢 郵稅金六錢

森羅萬象一として色彩ならざるなし、華麗と云ひ優美と賞し嵩高と稱し雄大と云ふも皆是れ色彩上の判斷に基く外なく、應用の廣くして、且つ深き色彩の學に及ぶものなし、然かも本邦未だ是れに關する良書あるを聞かず、故田口米作先生丹青の技を揮ふの餘暇常に心を色彩の研究に委ね材料を採集し新に考案を立て以て證述する所蔚として冊を成す、然るに先年不幸病歿せられ多年の若心空しく篋底に沒せんことを憂ひ、玆に神東惇先生の校訂を經て公にせられたるものなり、其色彩の原則及適用を記する秩序整然歷史的考證より裝飾應用に至る迄議論精確實に繪畫界必須の大著述たるのみならず苟も色彩に趣味を有する諸彥の座右缺く可らざるものなり

以呂波引

月耕漫畫

（精巧木版摺）

▲第一編 卷ノ一（自い至と）卷ノ二（自ち至か）卷ノ三（自よ至な）卷ノ四（自ら至ゝ）
▲第二編 卷ノ五（自や至て）卷ノ六（自あ至し）卷ノ七（自ゑ至す）（但各編共）
▲第三編 自卷ノ一至卷ノ七 全七冊 定價 全部一冊 金四十五錢 送料郵稅金四錢 小包四百匁迄
自卷ノ一至卷ノ七 全七冊 定價 全部一冊 金四十五錢 送料郵稅金四錢 小包四百匁迄
自卷ノ一至卷ノ七 全七冊 定價 全部一冊 金四十五錢 送料郵稅金四錢 小包四百匁迄
自卷ノ一至卷ノ七 全七冊 定價 全部一冊 金四十五錢 送料郵稅金四錢 小包四百匁迄

畫伯尾形月耕先生ノ筆力勁健ニシテ趣向警拔ナルハ世ノ知ル所ナリ本書ハ先生ガ得意中ノ得意ナルモノノミヲ蒐メタルモノニシテ俗ニ所謂繪畫ノ字引ナリ例ヘバ「い」之部ニハいざなぎの命、いかづち、いぬ、筏、芋掘、いなゝ祭ノ畫ヲ掲ゲ「と」之部ニハともゝり、とばゑ、となつ、とりゐ、とら、頓阿上人とくたけとうなす等ヲ載スルガ如ク一卷ノ畫數凡八十餘種人物アリ山水アリ花卉アリ鳥獸アリ魚介アリ悉ク紙面ニ躍然タリ斯道ニ學ブノ輩ハ勿論好畫ノ士ハ須臾モ座右ヲ離ス可カラザルノ珍本ナリ

發行所 東京市神田區通新石町 東陽堂 振替口座東京一二九六番 電話本局一九七〇番

京都帝國大學教授文學博士内藤虎次郎先生著

滿洲寫眞帖

插圖壹百種 解說附キ 全壹冊 正價 壹圓五十錢 郵稅八錢

本帖ハ寶器圖籍史蹟風景ニ渉リ壹百圖ヲ選出シ每版說明ヲ加ヘタリ專門ノ研究者ニハ至大ノ資料トシテ座右缺クベカラザル良書ナリ

寺崎廣業畫伯筆 （コロタイプ版）

廣業畫集

定價金五拾錢 郵稅金四錢

林學士高島北海先生著 二百萬分地質圖添付

寫山要訣

全一冊 定價金一圓二十錢 錢郵稅金八錢

此書ハ地質ノ學理ヲ山水畫法ニ應用セルモノニシテ畫山水ト眞山水トノ關係卽チ科學ト美術トノ調和ヲ論述セルモノナリ圖案ノ新奇論說ノ明確ナルト東洋ノ畫法ヲ以テ歐洲ノ風景ヲ寫出スルトノ點ニ至リテハ實ニ繪畫界ノ破天荒ト謂フベシ

故文學博士藤岡作太郎、平出鏗次郎先生合著

日本風俗史

上、中、下 全三冊

定價 上編金八十五錢 郵稅十二錢 中下編金一圓八十錢 同二十錢

○上編 自太古至源平時代 ○中下編 自鎌倉時代至江戸時代

本書ハ我國社會ノ發達風俗ノ變遷ヲ詳述シタルモノニテ國家ノ組織貴賤ノ狀態宗教ヨリ迷信ニ教育ヨリ人情ニ至リ衣食住ノ俗冠婚葬祭ノ式年中ノ行事歌舞遊戲ノ風等社會ニ顯レタル現象ハ網羅シテ遺スコトナク期ヲ別チ章ヲ改メ叙スルニ流麗ノ筆ヲ以テシ文ノ表シ難キ所精密ナル講ヲ以テ之ヲ補フ

新編 衣服裁積算法

全一冊 正價金七十錢 郵稅金八錢

本書ハ初經驗者ヲシテ裁積リノ法ヲ總ベテニ於テ通曉セシメンタメ先ツ尺度織物ノ丈尺ヨリ始メ各衣服ノ名稱、圖解、種類、注意事項裁方算法等ヲ通俗的ニ說明シタルモノニテ既ニ斯道ノ心得アル者ノ參考タルハ勿論初心者ト雖モ容易ニ會得スルヲ得ベシ

發行所 東京新橋通 東陽堂 振替口座 電話本局 一一九七 九〇六〇番

宋元明清諸名家遺墨○猪瀨東寧先生編

名蹟撮要

畫仙紙判大本（精巧木版摺）（甲、乙、丙、丁、）全二冊 帙入 定價金三圓 郵稅金十二錢

谷文晁先生畫

名山圖會

（石版摺）全三冊 定價金一圓五十錢 郵稅金十錢

谷文晁先生、寫山又樂山ト號ス、幼ヨリ山水ヲ好ミ四方ヲ漫遊シ名山大河ニ遇フ每ニ必ズ圖シテ而シテ畫軸ニ收メタリ名山圖會卽チ是ナリ本書ハ原版ヲ縮刻シタルモノニシテ意ノ到ル所筆ノ逮スル所印刷鮮明也畫學ノ輩速カニ一本ヲ購ヒ以テ粉本ト爲シ給ヘ

縮寫

東海道名所圖會

全八冊 定價金八十五錢 郵稅金八錢

方今名所舊蹟ヲ探尋シテ其ノ由來ヲ詳カニセントスルモノ頻々輩出シ、此レガ良書ヲ求ムルコト、猶大旱ノ雲霓ヲ望ムガ如シ、往時名所圖會類ノ、刊行セラレタルモノ夥多アリト雖モ、其原板ヲ失ヒ卷帙散亂シテ得ルニ容易ナラズ、爾來星霜ヲ經ルニ隨ヒ、遂ニ泯滅スルナキヲ保セズ、因テ弊堂ハ寫眞術ヲ應用シテ、更ニ轉寫ス唯其形ヲ縮小スルノミニテ、其ノ眞ヲ全フスレバ實ニ寸珍ノ美本ナリト云フベシ

圓山應擧畫○寺崎廣業先生摹

難福圖卷物

（精巧石版彩色摺）福一卷 難二三卷 全三卷 函入 定價金五圓 郵稅小包四百匁迄

此卷物ハ有名ナル三井寺ニ珍寶トシテ秘藏セラル、處ノ故圓山應擧ガ多年丹精ヲ凝シテ描キタル七難七福ノ圖ヲ弊堂獨得ノ妙技ヲ以テ石版印刷ニ附シタルモノニシテ他ニ比類ナキ至珍ノ繪卷物ナリ

須原畏三君著

扶桑書畫款印集覽

天、地、玄、黃 全四冊 定價金一圓十五錢 郵稅金六錢

本書ハ上千載ノ古昔ヨリ下現世ニ至ル儒者、詩人、書家、歌人、隱逸、俳人、古畫、浮世繪、四條、文人畫等有名諸大家五百有餘名各部門ヲ別チテ其ノ落款及印鑑並ニ手跡ヲ載セ一々小傳ヲ附シタルモノニテ斯道ニ念アルモノ一本ヲ備フレバ如何ナル古書畫ヲモ容易ニ鑑別スルヲ得ベシ

發行所 東京新橋通 東陽堂 振替口座 電話本局 一一九七 九〇六〇番

渡邊知三郎君編○故富岡永洛畫伯筆

華山 忠孝血涙譚

全一冊　定價金五十五錢　郵稅金四錢

本書ハ華山渡邊登先生誕生以來ノ事蹟ヲ細大漏サズ序ヲ追フテ纂錄ス行文平易兒女ニモ讀ミ易キ小說體ノ詳傳ナリ世ニ先生ノ傳記ヲ錄セシモノ數多アレドモ恐クハ此書ノ右ニ出ヅルモノナカラン

菅原白龍先生書

草書千字文

全一冊　定價金三十錢　郵稅金二錢

白龍山人ノ畫ニ巧ミナルハ世人ノ知悉スル所而シテ未ダ其書ニ妙ナルヲ知ルモノ尠シ山人極メテ草書ニ巧ミニシテ其運筆縱橫潑墨ノ妙龍天門ニ跳リ虎鳳闕ニ臥スルノ概アリ此帖ヲ繙カバ必ラズ其眞價ヲ窮知スルヲ得ベシ

生川春明翁著○大槻修二先生校訂

近世女風俗考

全一冊　定價金五十八錢　郵稅金六錢

此書ハ古昔ヨリ現時ニ至ル婦女子ノ髮ノ結振、櫛、笄、簪ノ事ヨリ鎖、被衣、帽子、振袖、帶、日傘、足袋等ニ至ルマデ苟モ婦人ノ風俗ニ關スル一切ノ事實ヲ最モ精緻確實ナル考證ニ據リテ編述シタルモノナリ

菊地容齋先生著

考證 前賢故實

全二冊　特價金一圓六十錢　郵稅金十五錢

本書ハ嘗テ天覽ヲ辱フシタルモノニシテ當時日本畫士ノ名稱ヲ賜リタル容齋菊地先生ノ著述ナリ、圖中ノ服飾器具等ハ悉ク古器古圖ニ徵シ一モ杜選ナキヲ證明セムガ爲メニ、先生畢生ノ苦心ヲ以テ其ノ考證ヲ蒐集セラレタルモ生前刊行スルニ至ラズ久シク菊地家ノ秘物トナリ深ク篋底ニ藏メアリシヲ、今回令孫菊地武丸君ト相謀リ之ヲ鮮明ナル寫眞石版ニ付シテ發兌セリ傳記ニハ一々各種引用書注ノ意アリ更ニ旁訓反點ヲ加ヘ且ツ訂正ヲ爲シ第十一卷ニ至リ、考證記事ト故實圖一百餘ヲ載セ添ルニ先生ノ自書肖像ト本書原稿ノ故紙ヲ以テ自カラ造ラレタル壽老人像ノ撮影トヲ以テシ其ノ碑文ト由來ヲ詳記シ大槻如電、今泉雄作、黑川眞道、關保之助、松本楓湖諸ノ大家ノ校訂ヲ經タル稀代ノ珍書ナレバ歷史家、考古家ハ勿論美術家ハ必ズ几上ニ一本ヲ備ヘザルベカラズ

繪畫叢誌 特別號

文部省美術展覽會號

全一部正價金六十五錢　郵稅金二錢

第四回展覽會出品ノ大作六十餘圖ヲ鮮明ナルコロタイプ版トナシ且ツ細評ヲ加ヘタルモノ

發行所　東京新橋通　東陽堂　神田石町
振替口座本番六〇九一一　電話番七〇九一

◎顏眞卿放生池帖（木版摺）乾、坤　全二冊
定價金七十五錢　郵稅金六錢

◎歐陽詢姚恭公墓誌銘（木版摺）全一冊
定價金三十五錢　郵稅金二錢

◎褚遂良孟法師碑（木版摺）全一冊
定價金四十錢　郵稅金二錢

◎魏張猛龍碑（木版摺）全一冊
定價金七十錢　郵稅金四錢

右ハ各其書中ノ最秀拔ナルモノ勁俊奇古自ラ蹊徑ヲ脫シ鋒款ノ雄優ニ神ニ通ズ須ラク書家ノ秘藏スベキ良書ニシテ將タ書ヲ學ズントスルモノハ亦此書ヲ措テ他ニ觀ルベキモノナカラン

松琳伊藤元延先生著並ニ書

◎ちらしふみ書式　全一冊
定價金二十五錢　郵稅金四錢

◎弘法大師眞蹟 綜藝種智院式（寫眞石版摺）全一帖
定價金二圓五十錢　郵稅金八錢

兼松蘆門先生著

◎竹田と華山　全一冊
定價金五十五錢　郵稅金八錢

曩ニ日本畫沿革史ヲ著シタル兼松蘆門畫伯カ揮灑ノ餘暇親シク竹田華山ノ墳墓ノ地ニ就キ幾多ノ遺墨ヲ見世間未聞ノ逸事ヲ探リテ細大之ヲ錄シタレバ一讀シテ兩大家ノ見識ト其技術トヲ窺ヒ特ニ畫ヲ學ブモノハ之ニヨリテ大ニ發明ナクンバアラズ

麻績斐、櫻井美成君纂定○大東、人見、上泉諸士贊助

◎東北偉人 雲井龍雄全集　全一冊
定價金三十八錢　郵稅金六錢

卷首ニ師ノ肖像ヲ揭ゲ卷末ニ其詳傳ヲ載ス本編ニハ詩歌ノ欄白田孤吟一班、絕韋餘閑、所感、述懷及ビ書牘、論說、陳情表、答辭書等凡テ師ノ手ニ成ルモノハ網羅漏サズ從來流布ノ詩文集類トハ頗ル其ノ選ヲ異ニス

瀨川サワ子編纂

◎名女傳　全一冊
定價金六十五錢　郵稅金八錢

本書ハ元ヨリ勸善奬學ヲ主旨トシタレド又品行以外才操、功業ニ於テモ選取シ貴顧、賢母、孝女、貞婦、名媛、才藻、卑女、漢土名媛、泰西女傑ノ九門ニ別チ總テ二百四十餘名ノ詳傳ヲ纂述セリ文字平易ニ且ツ平假名ヲ附シ誰人ニモ解シ易カラシム

發行所　東京新橋通　東陽堂　神田石町
振替口座本番六〇九一一　電話番七〇九一

◉百萬分一 大日本帝國地形全圖 十五枚繼 一部定價

◉同 同 地質全圖 十五枚繼 一部定價 和文金壹圓五拾錢 歐文金壹圓六拾錢 郵稅各金拾貳錢

◉百萬分一 大日本帝國地質圖說明書 洋裝全一冊定價 和文金壹圓八拾錢 歐文金壹圓五拾錢 郵稅各金拾貳錢

本圖ハ全國地質ノ構造及須布、火山ノ配置、山氷ノ趨勢、金屬、鑛山、石炭、石油、硫黃、有用鑛床及鑛泉等ノ位置ヲ精密ニ十五種ノ彩色ヲ以テ明示シタルモノ加之說明書ニハ重要トル鑛山、炭田、油井等ニ一々詳明ナル彩色地質圖ヲ挿ミテ說明セリ

無仕立	金四圓五拾錢	金五圓五拾錢	金壹圓八拾錢
仕立	金五圓	金四圓五拾錢	金參圓五拾錢
折本仕立	金六圓	金五圓	金壹圓五拾錢
軸仕立	金七圓	金六圓	金五圓
上軸仕立	金八圓	金七圓	金五圓
同ニス引	金壹圓五拾錢	金八圓	金六圓
	金拾壹圓	金拾圓	金五圓五拾錢
	金拾壹圓	金拾貳圓	金拾貳圓五拾錢

◉分二百萬分一 大日本帝國地質略圖 四枚繼 一部定價 和文金壹圓八拾錢 歐文金貳圓六拾錢 郵稅各金拾貳錢

◉分四十萬一 大日本豫察地形圖 全國五部 一部定價 和文金參拾錢 歐文共 郵稅各金拾貳錢 東北部、東部、中部、西南部

◉同 同 地質圖 同 一部定價 和文金參拾錢 歐文共 郵稅各金拾貳錢

◉分二十萬一 大日本地形詳圖 全國九十九部 一部定價 歐文金參拾錢 郵稅四枚迄金參錢

◉同 同 地質詳圖 同 一部 相模國武藏南部。羽後國飽海郡 郵稅四枚迄金參錢 過半既刊外漸次出版

◉分十萬一 大日本帝國土性圖 羽後國南秋田郡南部。越後國米山西山後國 郵稅金四拾五錢 河內和泉攝津國東部。周防長門二國。羽前全國越後國飛山後國泊國 郵稅金四拾五錢 加賀能登二國。武藏北部。

◉同 同 地質及地形圖 全一部 說明書附 郵稅金貳圓八拾錢

◉同 同 地質及地形圖 全一部 說明書附 郵稅金參圓五拾錢

◉同 同 地質及地形圖 全一部 說明書附 郵稅金貳圓四拾錢

◉同 同 地質及地形圖 全一部 說明書附 郵稅金貳圓四拾錢

◉同 同 地質及地形圖 全一部 說明書附 郵稅金貳圓四拾錢

◉遞信省御藏版 大日本鐵道線路全圖 全一部 定價金壹圓七拾五錢 郵稅金六錢

◉臺灣地形圖 全一部 定價金參拾錢 郵稅金貳錢

◉北海道地形圖 全一部定價 北海道廳御藏版 五十萬分一金壹圓八拾錢 郵稅各

◉大日本帝國地質圖幅說明書 郵稅金四錢 定價（岡防洋金貳拾五錢○鵜島金參拾七錢○日和佐金四拾錢○下縣金貳拾八錢○珠州岬ト縣各金貳拾錢）

◉地質調查所報告 第一號ヨリ第廿三號迄 既刊以下漸次發刊 和文歐文郵定價金壹圓五拾錢

◉地質要報第一號 郵定價金拾貳錢

◉練習用白地圖 日本全國外國全十枚 郵定價各金九錢

◉最近東京市全圖 全一部 郵定價金參拾錢

◉鐵道線路名勝案內 全一部折本定價金參拾錢 郵稅金貳錢

發行所 東京新橋通 神田石町 東陽堂 振替口座 電話 一一九〇 一一九〇 六〇七〇番

渡邊華山翁遺墨

◎一掃百態 （木版彩色摺） 全一冊 定價金一圓 郵稅金六錢

本書ハ華山翁ガ文墨ノ餘瀝ニ成レル正慶元享ノ頃ヨリ翁ガ當時ニ至ル迄ノ百般ノ風俗ヲ細大漏サズ描寫セシモノ氣韻自ラ高邁健筆一掃ノ間百態ノ人事歷々掌ヲ指スガ如シ

清本飜刻 （精巧石版伯紙摺最大形）

◎佩文齋耕織圖 全一冊 定價金一圓五十錢 郵稅金八錢

此書ハ清ノ康熙三十五年欽定セシモノニシテ耕耨ノ部二十三圖機織ノ部二十三圖一々康熙帝ノ御製ヲ挿ム製本古雅ニシテ圖ハ弊堂特技精巧石版繪ナリ苟モ耕織ニ志アルモノハ須臾モ缺クベカラザル珍本ナリ

高島得三先生著

◎歐洲山水奇勝 （精巧木版摺） （佛、伊、蘇） 全一冊 定價金一圓 郵稅金八錢

著者ハ歐洲ニ遊ビ山河ヲ跋涉シ遍ク彼地ノ奇勝ヲ探リ之ヲ描寫セシモノ一百餘圖ニ及ベリ爰ニ先ヅ佛、伊、蘇ノ三國ニ就キ其ノ尤モ絕奇ナル者ヲ擇ミテ出版ス凡ソ歐洲ノ勝地ヲ探ラムニハ數年間ノ日子ト數萬ノ旅費トヲ消歷セザルベカラズ然ルニ今座シテ之ヲ机案ノ上ニ觀ルヲ得ルハ蓋シ君ノ賜ナリ

尾形月耕先生筆

◎月耕畫鑑 （コロタイプ版） 第一卷既刊 一冊定價金一圓 郵稅金六錢

本編ハ元祿美人姉妹ノ大版圖ヲ首メ源氏蓬生、石清水、伊勢、春日三祠ノ高尙ナル琴碁書畫、仕丁ノ宴、熊野、名古曾關等ノ優美ナル花見、魚河岸、三王祭江戶ノ粹ヲ發揮シタル秀逸ナルモノ數十圖ヲ挿入シタリ

小原重哉先生筆述 王香堂畫譚 乾坤 全二冊 定價金六十錢 郵稅六錢

關山忠重 場下武民 重君 武君 君編 忠校 浮世繪編年史 全一冊 定價金七十五錢 郵稅六錢

（精巧木版摺） 全一冊 定價金一圓 郵稅金六錢

白龍山人菅原元道先生筆 ◎日本勝景 定價金八十錢 郵稅金六錢

發行所 東京新橋通 神田石町 東陽堂 振替口座 電話 一一九〇 一一九〇 六〇七〇番